おしどり夫婦へ２

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おしどり夫婦へ２

【Ｎコード】
Ｎ４５６５Ｅ

【作者名】
廉

【あらすじ】
前作『おしどり夫婦へ』の続きになります。あの新婚カップルのその後を書いています。これを読む前に前作を読んでいただけると嬉しいです。

第1話　再び・・・

朝、目を覚ますとたいていベッドの隣は空になっているのだが、たまに早く起きるとまだ彼女が眠っていることがある。
無防備な寝顔を見ると、早起きは三文の徳と言われる理由がわかる気がする。僕はジジ臭く肩をぼりぼりとかきながら、彼女を見つめる。無意識に体が動いて、たぶん僕はキスをしようとしていたと思う。だけど、唇が触れる寸前のところで彼女の目がぱちっと開かれた。
「おはよう」
「・・・・・おはよう」
意外に冷静に挨拶をされたので、逆に僕の焦りが強くなってしまった。そのままの姿勢で挨拶を返してしまった。
「で、何しようとしてたの？」
「・・・おはようのチュー・・・とか？」
「スケベ」
ばちんっといい音をたてて、実際にはかなり痛いデコピンをされて、僕はひっくり返った。彼女の力はハンパじゃないんだ。

何も知らない人がここまで読んでいると、僕らは恋人同士で同棲しているかのように思えるかもしれないが、恋人じゃない。夫婦だ。今年の春に結婚したばかりの新婚ホヤホヤだったりする。
僕の名前は葉山孝介（こうすけ）。妻の名前は美咲。
ノロケ話なんかじゃなく、美咲はかわいかった。特に染められていない綺麗な長い黒髪に、端正な顔立ち。歩いていれば、何人かの人が振り返るような綺麗な女だ。ただ、本人に自覚症状がないため、彼女は普段化粧をしない。すっぴん美人だ。
なりゆきで出会って、なりゆきでデートして、なりゆきでつきあってここまで来た。だけど、ここまでの過程は説明するのも面倒な

くらい長かった。そして、今こうして無事に夫婦になれたわけだ。

今年で22歳、4年生になったので、大学の授業はあまり入れていない。単位もあと少しで取れるし、卒論の準備もまだ大丈夫だ。

サークルもすでに引退していたが、それでも新歓コンパには参加することにした。今年は去年よりも少し遅めに開かれた。たぶん、その理由が僕たちの結婚式がその時期にあったため、忙しくてできなかったのだろう。だから、僕も感謝の意味をこめて盛り上げに行った。

「先輩が結婚なんてなー・・・」

2年後輩の塚本がしみじみとチューハイを片手に呟く。この男は酒が入ると、テンションが上がるどころか地の底までローになる。

「俺、なんで彼女できないんすかね。素朴な女の子と素朴に出会いたいだけなのに」

「人生いつどこでどうなるかなんてわかんないぞー？例えば夜のトンネルなんて狙い目かもな」

自分の経験論で言ったのだが、

「それは先輩がラッキーだったんですよ」

その一言で片付けられてしまった。普段、ジョーダンを言ってばかりいる塚本。今日はいつにも増してテンションが低い。

「新入生にいい人とかいないのかよ」

試しに聞いてみた。塚本の様子がだんだんおかしくなっているのがわかった。

「・・・・・彼氏いるんだって」

誰かのことを言っているらしい。途端に塚本はわーっと泣き出してしまった。さすがにぎょっとなってなだめたが効果はなく、今日はもう遅いということで、僕が塚本を家まで送っていくことになった。彼の家が近くて助かった。

それが起こったのは、吐いたり泣いたり状態の塚本を家まで運ん

でいくときだった。まさに絶好のシチュエーション、誰もいない夜のトンネル内だ。
そして、どこかで見たことのある光景。
数人の男が1人の女を囲んでいる。
その内の1人と僕は目が合った。心底冷たい瞳だった。
「おい・・・塚ちゃん、起きろ」
塚本は虚ろな瞳をぼんやりと開けたが、すぐには状況が飲み込めないらしい。ものすごいスピードで男たちが襲い掛かってくるのがわかった。しかし、なぜか体が動かなかった。たぶん、その理由は、女が金属バットを持って、さらに男たちを追いかけているからだ。
「ちらせらー！！！」
意味不明な叫び声をあげながら、女は今まで取り囲んでいた男たちを次々とバットで殴打していく。さすがの塚本も口を開けて固まっていた。
そして、彼女が僕と塚本のほうを向いて、
「うらー！！！」
その叫び声と共に、バットを振り上げたのを最後に見た。

白くぼんやりとした世界の中で、もう1度美咲に会いたいなと思っていた。
まるでこのまま死ぬみたいだ。
ってジョーダンじゃねー！結婚したばっかりなんだ！美咲がいるのに死んでたまるかよ！

目覚めは唐突だった。とにかく目がばちっと開かれて、見知らぬ天井を見た。
どこだ、ここ。
ゆっくりと体を起こすと、後頭部がずきんと痛んだ。ケガ？でも、なんでケガをしたのか覚えていない。ボケか？
ふと辺りを見渡すと、僕が寝ていたベッドの足元でうずくまるよ

うにして眠っている人を見つけた。
「美咲・・・？」
起こすつもりで呼んだわけではないのだが、僕の声に彼女がぴくりと反応して目を覚ました。なぜか泣きそうな顔で僕をまじまじと見つめてくる。
「どうしたの？怖い夢でも見た？」
「・・・・・・孝介の・・・ばかー！」
突然、力のないパンチが飛んできた。状況が飲み込めない。
「なんだよ？どうしたんだよ！？」
「どれだけ心配したと思ってるんだ！もし・・・孝介が・・・目を覚まさなかったらとか、いろいろ考えちゃって、すごい・・・・すごい心配したんだからな！」
目をそらして、涙をこらえているのがわかる。その様子を見て、ようやく自分の頭が覚醒(かくせい)してきた。そうだ、僕はトンネルで女の人にバットで殴られて・・・
「塚ちゃんは？塚本はどうなった？」
「・・・・・意識不明で運ばれたんだけど、今から2，3時間前に意識が戻ったって」
「そっか・・・よかった」
安心すると同時に、美咲の心情をようやく理解した。たぶん、病院から僕が運ばれたと連絡が入ったのだろう。美咲はどんな思いでずっとここにいてくれたのだろうか。
「美咲、ごめん。心配かけてごめん」
「もーいいよ。私もいきなり怒鳴ってごめん」
僕は美咲を長い間抱きしめた。

この事件はなぜか運ばれたのは僕と塚本の2人だけで、残りの男の存在は綺麗さっぱり知られていなかった。そして、なぜか女の存在も明らかにされていなかった。先に警察から事情聴取を受けた塚本は、殴られた相手を女だと認識しなかったらしい。

それにしても踏んだり蹴ったりだ。まさか去年と同じように新歓コンパの帰りにトンネルでこんな目に遭うなんて。

すぐに退院して、僕は美咲と一緒にマンションに帰った。

「まだ痛む？」

包帯の取れない僕の頭を見て、美咲が心配そうに尋ねる。僕は首を振った。

「大丈夫だよ。こう見えて石頭だし」

軽くジョーダンを言ったつもりなのだが、なぜか彼女は少し笑っただけだった。僕を殴った犯人がまだわかっていない今、そのことを心配しているのだろう。

そういえば、今になって思った。僕と塚本の救急車を呼んでくれたのは誰だったのだろうか。ひょっとしたら、あの女だとか・・・

なんか、気になる。あの女のことが。

「孝介・・・どうかした？」

美咲の声ではっとして我に返った。

「や、なんか気になる女がいて・・・」

ぼーっとしていた言い訳をしたつもりだったが、墓穴（ぼけつ）を掘ったことに気づいた。

「・・・・・サイッテー！」

「違う！そういう意味じゃなくて・・・俺を殴った相手のことだよ！たぶん、相手女だった」

「じゃぁ、いってらっしゃい、ユウちゃん」

「そうなのか？」

「うん。行ってくるよ、マミリン」

シリアスな会話の中に紛れ込まれるピンク色の会話。

はっとして振り返ると、玄関前でキスをしているカップルの姿が目に入った。同時に彼らもこちらを向いて互いに目が合う。

「もしかして、隣の人ですか？」

「よかった！何度行っても出ないから今まで挨拶ができなかったん

だ」
「私たち、７０３号室に引っ越してきた清水です。よろしくお願いします！」
呆然として何も言えない。いつのまにか隣に変なカップルが引っ越してきていたらしい。

第1話　再び・・・（後書き）

お久しぶりです。廉です。

おしどり夫婦へが好評だったため、続編です。

楽しんでいただけたら幸いです。

第2話　全員集合

「はい、アーンしてっ！」
「アーン・・・・・ん、すっごくおいしいよ！さっすがマミリンだね」
「やだぁ～もう。ユウちゃんのためだったら、私どんどん頑張っちゃう！」
　最初に言っておくが、ここは僕たちの部屋だ。だけど、この会話は僕と美咲のものではない。隣に引っ越してきた清水裕太と真実夫妻が乗り込んできたのだ。
　バカ夫婦を横目に見ながら、僕は美咲を真正面から眺める。
「美咲」
「却下」
「まだ何も言ってないじゃんか」
「うるさい。あんな恥ずかしいことなんてできるか」
　僕はちぇっと顔を背けると、ちょうど清水夫妻と目が合った。
「だめですよ。夫婦は仲良くしなくっちゃ」
「そーそー！私たちみたいにね」
　あなたたちは仲良し通り過ぎて、バカップルみたいです。そう言いたくなったが、のどの奥で飲み込んだ。
　裕太はどこにでもいる普通の男性で、真実は大学生のように若い外見をしている。
「心配されなくても、超仲良しなんで」
「よかったー。美咲ちゃん、すごくかっこいい旦那さんだね！ユウちゃんには負けるけど」
「そうかもね」
　それは、裕太には顔が負けるという意味ですか？
「それにしても、その頭どうしたんですか？」
　僕の包帯を見つめて、裕太が尋ねてくる。今になって僕は自分が

怪我をしていたことを思い出した。
「まぁちょっと打ち所が悪くて・・・」
曖昧(あいまい)に答えたそのときだった。急に裕太と真実が顔を見合わせて、すくっと立ち上がってしまった。いきなりの行動だったので、さすがに驚いた。
「じゃっ、お邪魔しましたー！」
やたら笑顔で2人は去っていく。
その一瞬の間に何があったのだろうか。まぁでも、これからはもう関わることがないんだろうなとなんとなく漠然(ばくぜん)とそう思った。

しかし、翌日、僕が大学から帰ってきたときだった。家のドアの向こうからぎゃーぎゃーと騒ぐ声が聞こえてきた。
家には美咲しかいないはずだ。お客さんでも来てるのかなと思ってドアを開けると、玄関に美咲がいた。それも、メイド服で。メイドで。
「美咲！？」
「こっ孝介！！」
初めて僕の存在に気づいたらしく、美咲は急に顔を真っ赤にさせて１８０度向きを変えた。その後ろに真実がいて、美咲が逃げるのを捕まえている。
「おかえりなさい。ちょっと美咲ちゃんをイメチェンさせてみました！」
「うん。すっげー・・・ちょっと意外」
「でっしょ～！これでメイド服は好きー？」
「そりゃー好きっすよ。美咲だったらなおさら」
「これでもっと仲良しだね！」
よくわからないことを言われたが、それで真実は満足したらしく、そのまま僕の隣を通り過ぎてしまった。
「じゃぁ、後はごゆっくり・・・・・」
にこにこと笑顔で言って、真実は去っていく。僕と美咲は取り残

される形になってしまった。
だが、美咲がすぐにメイド服を脱ごうとするので、僕は慌ててそれを止めた。
「これは・・・真実さんがなんか着ろって言ってきて・・・・・私の趣味じゃないって言ったんだけど、もう脱ぐ！！」
「待ってよ。その前にお願いがあるんだけど」
僕は美咲の細い腕をがしっと掴んだ。
「『おかえりなさいませ、ご主人様』って言ってみて」
次の瞬間、僕の体は宙を舞った。

「先輩、どうしたんですか？またケガっすか？」
「まーちょっとね・・・」
僕はあごの下をさすりながら答える。昨日の美咲のメイド服の一件で殴られてあごをすったのだ。
塚本はもうケガの具合は良好なようで、僕と違って包帯をしていない。大学で久しぶりに会った塚本は元気そうだった。
「っていうか、塚ちゃん、なんかテンション高くね？」
「そうなんすよ。俺、先輩に報告したいことがあって。いや、ほんと先輩の言うとおりでしたよ。トンネルって実は出会いの場だったんですね」
言っている意味がわからなくて、僕はふーんと首を傾げる。
「なんだよ、彼女でもできたのかよ」
「そうっす」
「マジかよ、相手誰・・・・・・・・」
言いかけて、僕は言葉に詰まってしまった。今、トンネルって言わなかったか？まさか、塚本の彼女って・・・
「まさか俺たちを殴った相手が女の人だったなんてなー。俺、すごい酔ってたからわかんなかったし」
そのまさかだった。
「お前、その女に会ったのか！？」

「うん。こないだの月曜日に。なりゆきでつきあうことにしたんです」
「なんで！？殴られたんだぞ？」
「あれにはちゃんと理由があるんですよ。俺たちもあそこにいたから、奴らの仲間だって勘違いしたみたいで、本人もすっごくかわいくてさー」
話が途中で変わっている。僕はウンザリとした気分になった。
去年の僕と同じくらい変な展開になっている。
「そうだ、先輩ってどこに住んでましたっけ？今度遊びに行きたいんですけど」
「いいけど、来るときはメールしてからにしてよ」
「モッチー」
塚本のテンションもだいぶおかしなことになっていた。

その日の病院で、ようやく僕の包帯も取れた。後頭部を殴られて、何針か縫ったらしいが、もう大丈夫とのことだった。それにしても、殴った相手とつきあうなんて塚本はどうかしていると思う。
そのとき、自転車に乗って家に帰ろうとしたときだ。小さな会社の前で頭を下げている男性の姿を見た。清水裕太だった。
何度も何度も頭を下げて、ようやく書類を受け取ってもらえたらしく、帰ろうとしたところで僕と目が合った。お互いに頭を下げた。

「いや、お恥ずかしいところを見られました・・・」
「いえ、俺も無遠慮にすみません」
立ち話でお互いに謝る。話によると、営業の仕事をしているらしい。ちょうど相手先の人との取引のところを僕は見たそうだ。
「マミリンにはこんな姿見せられないよ。彼女の前ではいつもかっこいい夫でありたいんだ」
「わかります。俺も美咲の前ではかっこわるい姿を見せられませんよ」

この人のこんな言葉を聞くとは思っていなかった。僕は人のこういう人間らしい姿に共感が持てるらしい。
「葉山さん、もし良ければ今度４人で食事でもしませんか？鉄板で焼肉とか」
「いいですね」
社交辞令ではなく、本当に一緒に焼肉を食べたいと思った。

それが現実になったときはあまりにも突然の出来事だった。
次の日、大学で塚本から急に今日遊びに行くと言われたのだ。それも彼女連れで。僕たちを殴ったあの女を連れて。
美咲には言えるわけがない。昨日僕の包帯が取れただけで、あんなに嬉しそうにしてくれた彼女があの女に会ったら何をしでかすかわからない。なにより、僕自身があんまり会いたくないんだ。塚本のヤツ、本当に何を考えてるんだ。
だけど、断れずにここまで来ている。
とりあえず、昨日裕太が言っていた焼肉でもしようかと思って美咲に買い物に行ってもらったが、いまだにどうしようかと悩み中だった。
「ただいまー」
「おかえりなさーい！！」
美咲の声が返ってくると思いきや、男の声と女の声が重なった。
なぜか清水夫妻がいた。
「え・・？清水さん！なんでここに！？」
「言ったじゃないですか。今度一緒に焼肉食べようって。そしたら今日はちょうど焼肉にするって聞いて、グッドタイミングですよ！」
は？昨日の今日でまさか本当に実行されるなんて思ってもみなかった。
裕太と真実がにこにこと笑ってその場に並んでいる。そして―・・・・・・・・
ドアが突然開かれた。

「あっれー？先輩、いたんですか？鍵開いてましたよ！」
は？まさかインターフォンも押さずに入ってきたのか？
塚本がにこにこと笑ってその場に立っている。そして―・・・・・・
・・・

肩までの髪の毛がカールした女の人が塚本の後ろに立っている。
その瞳がまっすぐに僕を見つめていた。

第2話　全員集合（後書き）

美咲のメイド服はまた出てくる予定です。
いまのところ恋愛要素は少ないですが、
そのうち出てきます。孝介と美咲です。

今回はシリアスも入れていきます。
後半、美咲が大変なことになるかもしれません（予定）
気長によろしくお願いします。

第3話　賭け

１つのテーブルを６人が囲み、焼肉パーティは始まった。
「じゃぁ、肉どんどん入れちゃうよー」
主導権を握るのは清水真実と美咲らしい。焼肉や野菜を鉄板の上に並べていく。それを残った人間が食べていった。
僕は塚本や裕太にビールを注がれ、されるがままに飲みまくってしまい、肉が3分の1なくなったときにはすでに酔っていた。
「先輩、飲みすぎですよ」
塚本がからかうように僕の頭を小突く。テンションが下がっていないことから、まだ塚本はあまり酔っていないらしい。それどころかハイになっているような気もする。少しでも酒を飲むとローになっていくこの男が、清水夫妻とこんなに仲良く喋っているところを見るとそう思う。
最も驚いたのは、真実に言われて美咲も飲んでいたが、彼女も酔っていたことだ。今まで何度か一緒に飲んだことはあるが、基本的に酒は好かないらしく、飲んでも酔ったところを見たことがなかった。ところが今日は、
「孝介と初めて出会ったのはトンネルの中で、間違えてカツアゲ・・・・・」
僕との身の上話を話し始めるなんて明らかに酔っている。この話の流れで、もし塚本が「俺たちもトンネルの中で出会ったんですよ」なんて言い出したらどうしようかと本気で思った。
「俺たちもトンネルで出会ったんです」
げっと思ったが、それを言ったのは塚本ではなかった。清水裕太が真実と顔を見合わせて、にこにこと笑っている。
「中学のときに地下トンネルの中で会ったんです。そのときに意気投合して、カケオチしてきたんです」
「カケオチしたんすか？」

塚本が驚いて声をあげる。僕も美咲と短いカケオチをしたことがあるが、たぶん彼らのほうが本格的だろうとなんとなく思った。
ふと、視線を感じてそちらを向く。塚本の彼女、つまり僕たちを殴った女だ。お互いに目が合ったが、やっぱり互いに何も言わなかった。

「つばめさんは今大学生なんですか？」
真実に話を振られて、初めて江藤（えとう）つばめが口を開く。
「いえ。高校3年生です」
「わっかいねー！！私もそんな時期があったんだよ～」
「マミリンはいつだって若いじゃないか。俺の自慢の奥さんだよ」
「もうやっだ～ユウちゃんったら～」
変なバカ夫婦は置いておいて、そのとき別の部屋からケータイが鳴る音がしたので、一言言ってから僕は席を立った。

バイト先からの電話を終えてケータイを切ってみて、ふと何かの視線を感じた。慌てて振り返ったが、そこには誰もいなかった。
気のせいか・・・僕はまたケータイを机の上に置いて、みんなのいるリビングに戻ろうとすると、視界の片隅で何かが動くのを発見した。
「わっ！！」
思わず声をあげてしまった。なんと僕らのベッドの上で1人の人間が転がっているのだ。
「なんだ・・・美咲か。驚かすなよ」
「んー・・・・・孝介ー、眠い」
なぜか、ベッドの上にいるのは美咲ではないと思っていたらしい。だったら誰が寝転がっているんだ？
「飲み過ぎなんじゃないのかー？」
顔を近づけて苦笑すると、確かにお酒臭かった。美咲がとろんとしたような瞳で僕を見上げてくる。その表情に一瞬理性を失った。

気づくと、僕は美咲にキスをしていた。自分でも無意識な行動だったので正直驚いて、目をぱちくりとさせる。だけど、自分の中の男の本性のほうが勝った。僕はまた美咲の唇や頬、耳にキスをした。
「くすぐったいよ・・・・・・前髪・・・坊主にしよ・・・・・」
「やだ・・・・・ちょっと・・・・ガマンしてて」
いつのまにか美咲を押し倒していたらしく、正気に戻ったときには僕自身もベッドの上にいた。さすがに別の部屋に人がいるのにこれ以上はだめだと慌てて起き上がった。
美咲は寝てしまったらしい。僕は彼女に布団をかぶせて部屋を後にしようとした。
―背後のドアの向こうに江藤つばめがいることに気づくまでは・・・

「お邪魔でしたか？」
「ううん。もう寝ちゃったみたいだし」
僕は静かに部屋のドアを閉めた。そして、小柄な女の子に向き直った。
「俺は塚ちゃんのように優しくはないから、怒ってないって言ったらウソになる。でも、なんで俺たちを殴ったの？」
その質問の答えはたぶん塚本に聞いたとおりだろう。だから、何を言われても大丈夫かと思っていたが、
「宝探しゲームです」
いきなりそんなことを言われて、さすがにきょとんとなってしまった。それでも彼女の顔は真剣そのものだった。
「なに・・？どういう意味」
「そのまんまの意味です。私は宝を探してるんです。そのために手段は選びません。邪魔するようなら誰だって容赦はしない」
「ふざけんなよ。そのために人に暴力をふるうのか？俺や塚本だって当たり所が悪ければ死んでたかもしれないんだ」
意味不明な答えに少しいらっときてしまった。高校生相手に大人

気ないと思ったが、この人のやったことは殺人未遂のようなものだ。僕は妙に強気になってしまった。もし彼女が謝ることができたのなら、僕は許そうと考えていたのに。

「邪魔さえしなきゃ、葉山さんに危害を加えません」

「意味わかんないし。だいたい、なんなんだよ宝って」

「それは・・・・・」

何か言いかけたところで背後から突然かちゃっと音がした。びくっとして振り返ると清水裕太がケータイを持ってリビングから出てきたところだった。彼はしばらく僕たちをぼんやりと見続けた後、

「まさか・・・・・2人とも浮気してたわけじゃないですよね・・・」

異様に低い声でそんなことを言われた。僕は慌てて否定したが、つばめが何も言わずに俯いているので、ちゃんと裕太に伝わったかどうか不安になった。

結局、この日の焼肉パーティは午後10時に終了した。なんとなくどっと疲れたのは気のせいだろうか。

「美咲さんは？」

キッチンで皿を洗っていると、真実が食器を運んできた。

「もう寝ちゃったみたいです。あんなに飲んだの久しぶりなんじゃないかな」

「そっか・・・ちょっと飲ませ過ぎちゃったかな」

確かに、僕を誘惑するようなまなざしはシラフのときにはやってこない。いや、たぶん誘惑したつもりはないんだろうけど。

「孝介さんって幸せだね。美咲さんをすごく愛してて、愛されてて・・・」

「それを言うなら、真実さんたちだってそうでしょ。いっつもラブラブじゃないですか」

「そうでしょ～私、ユウちゃん大好き！世界で1番好き！・・・仕事が上手くいってないときもあるけど、彼は私のヒーロー！」

その言葉に僕は言葉を詰まらせた。まさか、昨日の僕たちの会話をどこかで見ていたのだろうか。いや、それ以前にもともと知っていたのかもしれない。仕事で失敗しても家庭には持ち込まない夫。そんな夫に気づきながらもずっと支える妻。

僕の知らない家庭だ。それが理想の家庭だというわけではないが、これはこれでいいんじゃないかと思う。

「そうですね。俺も美咲が大好きです」

僕も偽(いつわ)りなくそう言えた。

帰る直前、塚本がトイレにこもったので僕はもう1度江藤つばめに話しかけた。

「さっきの話の続き、江藤さんの探してる宝ってなに？」

彼女は僕を観察するかのようにじろじろと眺めた後、ふいに顔をそらした。その態度が気になったが、僕は返事を聞くのが先だと思って何も言わなかった。

「賭(か)けましょうか」

「は？」

「私がその宝を見つけるのと・・・あなたが私の宝の正体に気づくの・・・どっちが早いか」

「面白いじゃん」

断っておくが、最後に言った言葉は僕ではない。僕の背後からその声は聞こえてきたのだ。

振り返ると、寝ていたはずの美咲が立っていた。

「美咲！？起きてたの？」

「・・・起きてちゃ悪いか」

今の美咲は機嫌が悪いことがわかった。

「私たちの会話を聞いてたんですか？」

「うん。正確には、聞こえただけどね。孝介の声が大きくて目が覚めたんだ。だから、あんたが孝介を殴ったことは知ってる」

美咲の指がぼきぼきと鳴らされる。

「今までの私ならこの場でぶっ飛ばしてるんだけど、結婚してから考え方がぬるくなったよ。その賭け、私が乗った」

第４話　初めてのケンカ

朝起きて早々、美咲をベッドの上に座らせ、僕はベッドの下に正座した。寝起きの彼女は機嫌が悪そうだったが、それでも構わず質問を開始する。

「美咲、落ち着いて答えてよ。今何を考えてる？」

「・・・何も？ただ、猛烈に怒ってるだけだ」

怒気を含んだその声は、最初に会ったときのように恐ろしかった。ベッドの上という高い位置に座っているためか、余計にその恐ろしさは倍増する。

「あの江藤とかいう女が自分を殴ったってことに気づいてたんだろ。なんで私に言わなかったんだよ」

「言えるわけないじゃん。余計な心配かけたくなかったし」

「そうかもしんないけど・・・・・だけど・・・」

そのまま美咲は何も言わなくなってしまった。僕も言葉に詰まる。

正直、まだ塚本の彼女が僕たちを殴ったなんて半信半疑で確信がなかった。だから、最初に会っても何か問いただすことはしなかったし、２人で話す機会がなければこのまま追及はしなかっただろう。

「なんていうか、あの人やばいと思う。なんか宝探すとか、そのためには手段を選ばないとか、塚本には悪いけどちょっと変だって。美咲に何かあったら嫌だ」

「孝介だって私に何にも言わなかったじゃん。そっちも勝手したんだから、こっちも勝手する」

美咲は聞く耳を持たない。僕は殴られた経験を生かして、必死になって彼女を止めようとしているのだが、

「美咲、待てって・・・」

「もーこの話は終わり！やめよう」

「人の話聞けよ！」

思わず怒鳴ってしまった。さすがに美咲はびくっとなって固まっ

て、今まで見たことのない微妙な表情を見せた。僕は唐突に大声を出したことを後悔した。
「ごめん・・！その、怒鳴るつもりはなかった・・・・ごめん」
謝った矢先に美咲は僕の前から逃げ出した。
心の中に何か重たい物がずしっと覆い被さったのを感じた。怒るつもりなんてなかった。ただ、美咲に無茶をさせたくないだけだったんだ。
ただ、それだけだったんだ・・・・・

美咲は出て行ったわけではない。ご飯は作ってくれたし、普通に家事をしていた。明らかに違うのは、ここ数日僕と目を合わさなくなったことだ。
「これ、おいしい」
「そう」
彼女の作った味噌汁を褒(ほ)めたのだが、美咲の反応はそっけない。ここまで来てしまうともういつ謝ればいいのかタイミングがわからない。
事の発端(ほったん)となった江藤つばめにもう1度会わないとな・・・僕はそう思い始めていた。
そのとき、美咲が何か言おうと口を開きかけたことがわかった。
「え、なに？」
先を促したのがいけなかったのか、美咲は首を振って何も言わなくなってしまった。

塚本に連絡を取り、江藤のアドレスを知ることができた。それでも塚本に、
「先輩は結婚してるんだから、俺の彼女に手を出さないで下さいよ」
誰が出すか、と言いたくなったがやっぱりやめておいた。そもそも塚本に普通の感覚が通用しないことはすでにわかっている。
1人になったところで、僕は江藤にメールを送った。時間帯がた

ぶん高校だと授業中だと思ったのだが、意外にも彼女からの返信は早かった。
『大丈夫です』
返信メールは実にシンプル。僕からのデートの誘いにすぐにオッケーしてくれた。僕はそれを確認してから、静かにケータイをぱたんと閉じた。

「こんな所でデートですか？」
高校が終わってそのまま来てくれたらしく、江藤は制服姿で現れた。彼女を呼び出したのは何人かの子供がいる体育館だった。美咲に江藤と一緒にいるところを見られたくなくてここを選んだのだが、まるで浮気でもしているかのような気分になった。
「とりあえず、ここまで来てくれてありがとうございます」
丁寧にお礼を言うと、江藤はそれを無視して落ちていたバスケットボールを手にとって、ゴールに放った。ボールはリングに当たってあさっての方向に飛んでいった。
「あぁぁぁ失敗だ」
「あのさ、話聞いてほしいんだけど」
江藤はボールを取りに行く。
「俺も美咲も江藤さんの宝探しの邪魔はしないし、関わるつもりもない。だから、賭けもやめてほしい」
「賭けに乗ったのは、葉山さんの奥さんのほうなんじゃないですか？」
そう言って、僕にボールを投げてよこした。
「そこからシュート決めれますか？」
僕の立っている位置だと、決まればスリーポイントである。こう見えても高校まではバスケをやっていたのである程度のシュートは決まると思うが、どうもスリーポイントシュートだけは苦手だった。
僕はゆっくりと構えて、そしてシュートを・・・・決めた。
「っしゃ！」

思わずガッツポーズが出た。リングに引っかかることもなく、綺麗にすとんと入った。久しぶりのこの感覚に嬉しさが倍増した。
「へー・・・すっごーい・・・・・」
江藤の感嘆ぶりに僕は照れくさくなって笑った。そして、笑うと同時に視界の隅になぜか美咲の姿を見つけたような気がした。
気のせいじゃない。美咲だった。体育館の出入り口で驚いたような顔で僕のことをまっすぐに見ていた。
「美咲！！」
思わず叫んでしまった。だけど、体育館の喧騒（けんそう）に飲まれて、声は吸収されて聞こえなくなった。
「電話でここだって教えたんです」
驚いて江藤を見ると、彼女も無表情で美咲のことを見ていた。僕はもう1度出入り口を見たが、美咲はいなくなっていた。
慌てて駆け出す。ケータイを取り出して美咲にかけてみるが応答はない。
ずっと捜し続けた。だけど、美咲は見つからなかった。

結局、美咲は家に帰っていたことがわかった。試しに話しかけてみたが、今度は返事もなかった。
今まで家事を分担してやっていたのだが、彼女はそれを全部自分1人でやるようになってしまった。おかげで話しかける機会がなくなった。
だけど、話さないとな。今日のこと一応・・・
寝室に入ると、美咲はもう布団中に入っていた。僕は彼女が起きているものだと信じてベッドに座って喋りだす。
「今日、体育館にいたのは江藤さんと話をつけにいくためだった。別にそれ以外の理由があったわけじゃないから」
返事はなかった。身動きもしなかった。
だけど、なんとなく僕には美咲がまだ起きているって確信があった。だから、それ以上は何も言わずに僕もベッドに入った。

翌朝、バイトで朝早く起きると、美咲がいなかった。
一瞬慌てたが、リビングのテーブルの上に書き置きが残してあって、『6時までには戻る』というそっけない文章が書かれてあった。だけど、1週間まともに会話していなかったためか、これだけの文章でもなんだかすごく嬉しくなった。
と、そのとき玄関でピーンポーンと鳴った。
「はい」
ジャージ姿でそのまま出ると、外に立っていたのは隣の清水裕太だった。
「あれ、清水さん、どうかしたんですか？」
「ちょっとかくまってください」
「は！？」
そう言って勝手に中に入っていく。その様子は冗談ではなさそうだった。
まさか僕たちのようにケンカでもしてるんじゃないかと本気で疑ったが、話を聞くとそうではなさそうだった。
「マミリンの家族が来てるんですよ」
「え・・？だって清水さん、カケオチしてきたんじゃないんですか？」
「ちょっといろいろあったんですよ・・・・・」
その頃、美咲が江藤つばめに会いに行っていたことに、このときの僕は気づいていなかった。

第5話　変化

「聞かないんですか？どうして俺が逃げているかってこと・・・」
だいぶ落ち着きを取り戻した清水裕太が不思議そうな顔で尋ねてくる。僕はさっき淹(い)れたばかりのコーヒーのマグカップを手持ち無沙汰(ぶさた)に持ちながら、その質問に対する答えをうーんと考えた。
「誰にだって聞かれたくないことの1つや2つあるでしょ。清水さんが話したいときにでも話してください」
けらけらと笑って答えると、申し訳なさそうに裕太が頭を下げた。
正直、話に興味がないと言ったらウソになるが、常識的に考えてここは聞くべきではないだろう。
何気なく時計を見る。もうすぐバイトの時間だ。これから先のことを少し迷っていると、唐突にマグカップを置いて裕太が立ち上がった。
「コーヒーごちそうさまでした。もう帰ります。いろいろとご迷惑をおかけしてすみません」
「え・・・あ、はい。もう大丈夫なんですか？」
玄関まで見送っていくと、彼は靴をはきながらこくんとうなずいた。
「大丈夫。それに逃げてちゃダメなんです・・・」
いつか同じような言葉を僕は言ったような気がする。美咲とカケオチみたいなことをしたとき。そうだ、あのときの僕も同じことを思った。今、思い出した。
「真実さんが嫌がってるんですね。清水さんが自分の家族と会われるのを」
靴をはく手が止まった。そして、驚いた表情で僕を見る。
「どうしてそれを・・・」
「俺も一緒です。同じことを思ったことがあります」
驚く裕太の顔が印象に残った。僕もあのときのように彼女と話し

たかった。今はもうどうすればいいのかわからない。

その電話がかかってきたのは夕方、5時頃の話だった。

バイトから帰ってきてすぐケータイが振動していることに気づいて、相手を確認してから電話に出る。電話なんて珍しい。

「うーっす」

『先輩、つばめのこと見ませんでしたか？』

電話の向こうの塚本の慌てた声が降りかかる。声の調子でそれが尋常（じんじょう）ではないことに気づく。

「見てないけど、どうした？」

『今日会う約束してたんですけど、時間になっても来なくて・・・』

ふと、僕は美咲の行き先について気になった。彼女は一体どこに行ったんだ？

「わかんないけど、俺もちょっと捜してみるよ。なんか心配だ」

『すんません』

ツーツーという電子音を聞きながら、僕の中で何かが渦巻いていくのを感じた。なんだろう、この感じ。美咲・・・？

美咲に電話してみた。しかし、電源が切られていることがわかって、慌てて家を飛び出した。

息が苦しくなってきた。日頃の運動不足のせいですぐに足が痛くなってしまった。

まだ6月だというのに汗が出てきた。一体美咲はどこにいるのだろうか。電話はあいかわらずつながらない。

なんとなくだが、美咲と江藤は一緒にいる気がする。根拠のないカンだったが、こういうのは昔からよく当たるんだ。

もう1度塚本に電話してみる。しかし、むこうも見つからないとのことだった。

6時を過ぎたので、一旦家に帰ってみたが、美咲はまだ帰っていなかった。

『先輩！』
塚本からの電話はずいぶんと慌てたものだった。僕は心臓がどくんと高鳴るのを感じた。
「見つかった？」
『つばめは見つかりました。あの、先輩落ち着いて聞いてください・・・・・美咲さんが病院に・・・・・・』
「え・・・」
一瞬放心状態になった。美咲が・・・病院？
「どういう意味だよ！？」
『わかりません！俺もつばめから連絡もらっただけなんで・・・ただ、今は市民病院にいるみたいです！』
「すぐ行く！」
もう何も考えられなかった。僕は鍵を閉めるのも忘れて家を飛び出した。

市民病院へは行ったことがなかったので、自転車で駅まで行き、そこからタクシーに乗った。僕はずっと外を眺めながら、巨人かなにかに心臓を鷲掴(わしづか)みにされているような錯覚を覚えた。
病院にはすぐに着いた。正面玄関から入って、ロビーで葉山美咲の名前を出した。自分の勘違いであることを祈って。
しかし、ロビーの女性は3階の部屋の名前を告げた。それが現実だと僕に教える。
焦る気持ちを抑えて、その部屋まで行く。病院の匂いが鼻をつく。
1人部屋、葉山美咲。そう名前が書かれていた。

そのままドアを開けてしまうのを抑えて、僕はノックした。すぐに中から誰かが出てきた。塚本だった。
「先輩」
「美咲は？」

病室に入るとすぐにベッドに寝ている人の姿が視界に入った。
「美咲・・・？」
美咲は頭をケガしたのか額にガーゼが当てられている。真っ白いそれが見ていて痛々しかった。今は眠っているらしい。
そして、その傍で江藤つばめがぐったりとして座り込んでいた。
「・・・何があったの？」
僕の問いに、塚本が答える。
「ここに運ばれてきたときは・・・もう気を失っていたそうです。でも、命に別状はないらしいです！額の傷も軽いみたいで、じきに目を覚ますだろうって」
頭が放心していた。なんだか現実のことじゃないみたいだ。
僕は傍の江藤を見た。彼女はずっとうつむいたまま動こうとはしない。僕はもう1度、今度は江藤に同じ質問をした。
「何があったの？」
彼女はゆっくりとした動作で顔を上げた。いつかの美咲みたいだ。焦点の合わない目で僕のことをぼんやりと見つめる。やがてはっきりと僕がわかったのか急に目を大きく見開いた。
「私は・・・悪くない」
「誰も責めちゃいないよ。ただ、何があったのか聞いてるだけだ」
口調が強くなってしまう。責めていないと言っても、これじゃぁ同じことだ。とことん自分に嫌気が差した。
「私は悪くない！」
「先輩」
もしこのとき塚本に話しかけられなかったら、僕は彼女に何を言ってしまうかわからないところだった。とにかく肩の力を抜いて落ち着こうと考えた。
「ごめん」
2人に対しての謝罪が自然と口から出た。
僕が連絡してから、美咲の両親が来るのはそのすぐ後のことだっ

た。僕は申し訳ない気持ちでいっぱいになって、顔が上げられなかった。だけど、お義父さんもお義母さんも誰かを責めることはしなかった。それがありがたくて、辛かった。

みんな一晩中、美咲の傍にいた。

１度僕はトイレに行った。そのときエレベーターに向かっていく江藤と塚本の姿を見つけて、慌てて後を追いかけた。

「どこ行くの？」

時刻は１２時をまわっていたので、自然と小声になる。消灯時間だから、廊下も当たり前のように暗い。

「明日学校があるので帰ります」

塚本が答える。

「そっか・・・」

「・・葉山さん、最初に私と会ったときのことを覚えていますか？」

急な江藤の話に僕は首を傾げそうになったが、うなずく。

「あのとき私はケンカして人を殴りました。今日はその仕返しです。美咲さんは私をかばってくれたんです・・・・でも、相手が男子数人だったから、押さえ込まれて、そのまま・・・・・・美咲さんは自分から階段を落ちたんです」

それだけ話すのにすごい苦労したようだ。僕はそれを理解したが、それでも１つだけ聞かなければならないことがあった。

「その男子の特徴教えて」

「葉山さん！」

「いいから・・・お願いだから・・・・・」

病室に戻ると、ベッドを取り囲んでみんなが口々に声を出している。もしかして、と思って僕もその輪に入ると美咲が上半身を起こしている。

しかし、目を覚ましたらしいが、その様子がおかしいことに気づいた。

「美咲！」
取り囲む輪の中に入ったとき、美咲がびくっと体を震わせたのがわかった。
「孝介・・・・・ごめん、あの・・・・・私、ごめんなさい」
泣きそうな顔で、おびえた顔で体を小さくする美咲。見ていて痛々しかった。
僕は美咲を怖がらせないようにゆっくりとした動作で彼女の手を握った。びくっとされると思ったのだが、彼女は僕の手に額を当てて、静かに泣き出した。ガーゼの感覚が妙に生々しかった。
「守ってあげられなくて・・・・・ごめん」
自分でも情けなくなるような声だった。彼女はただ首を振る。
このとき、僕の中で何かが変わった。

第5話　変化（後書き）

うーん・・・なんかシリアスになってきたなー・・・

とりあえずもう少し彼らにつきあってやってください。

第6話　仲直り

なじみのない高校の校門前。僕は門にもたれかかってそのときを待っている。何を考えるでもなく。

「・・・・やっぱここだったんですね、先輩」

見覚えのあるスニーカー。顔を上げると、塚本が目の前に立っていた。予想していなかったので、僕は少し驚いた顔になるのを感じた。

「塚ちゃん・・・・なんで」

「つばめにあいつらの特徴を聞いたとき、俺も近くにいたじゃないですか」

そうか・・・考えてみれば塚本がここにいてもおかしくない。

「奥さんの具合は大丈夫ですか？」

「うん。今日退院したんだ」

「傍にいなくていいんすか？」

「いるって言ったんだけど、授業は出とけって怒られた」

今朝の会話を思い出して苦笑する。つい先日まではそんな会話もなかったのに、なんだかそれがおかしなことのように思える。それに、授業に出ろと言われてきたのに、こんな所にいる自分は絶対変だ。

目覚めたときよりは美咲は元気そうだった。でも、誰もがそれがから元気だってことに気づいている。実家で静養するという選択肢もあったのだが、美咲は僕と一緒にいることを選んだ。僕は嬉しかったが、本当にそれでよかったのだろうか。

「こんな所にいていいんですか」

もっともな質問だ。塚本は俺のしようとしていることを見抜いている。

「お前も好きな女が誰かに襲われたら、俺と同じことしてると思うよ」

「・・・たぶんするかも。でも、今の立場だから言えるんだけど、奥さんきっと今頃1人で心細いんじゃないんですか？もし先輩がケガしたり、なんかしたりしてたら、絶対悲しむと思うけどなー」
「俺は・・・・・ただ、あいつらを警察にたたき出せたらって思ってるだけで・・・」
口ではそう言ったが、実際の話どうしたいかなんて考えていなかった。ただ、どう転んでも穏便（おんびん）に済ますつもりはなかっただろう。
そのとき塚本が急に真面目な顔をして、
「先輩、本当のこと話します」

塚本が江藤つばめの目的を知ったのは、2度目に彼女に会ったときだった。トンネルの中で偶然出会ったときは、正直運命的なものを感じた。
しかし、やっぱり最初はなぜ殴ったのか、そのことを聞いた。すると、彼女はこう言った。
「邪魔をするようなら容赦はしません。だけど、あなたたちを殴ったのは謝ります・・・・・あの後、すぐにあいつらの仲間じゃないことに気づいて救急車を呼びました。そのとき、失礼だと思ったんですけど、あなたの免許証を見ちゃいました。それで、このへんに住んでるってわかって・・・・・今行こうとしてたんです」
「じゃぁ、君の探してる宝ってなんだよ？」
それが、この話を聞いた者の持つ最も大きな疑問だろう。塚本がその返事を待っていると、彼女は静かにその言葉を告げた。
「―好きだった人の敵討ちです」
話によると、江藤は別の高校に好きな人がいたらしい。しかし、その男は死んだ。高校でいじめに遭って自殺したのだ。彼の敵を討つために、その元凶を作った彼と同じ高校の男子生徒5人組に対して、江藤は夜に彼らが行きそうな場所を張っていたそうだ。
塚本はそれが間違っていることに気づいた。だけど、何も言えなかった。彼女が本気だと気づいたからだ。

「すべて終わったら、私も警察に行きます。それまでは邪魔しないでください」
「いいよ。その代わり条件がある」
それが、自分の彼女になることだった。
その後、葉山のもとに江藤を連れて行った。彼女が葉山夫婦に冷たく当たってしまったのは、幸せそうだったから、だそうだ。彼らには邪魔されたくなかった。

塚本の話を聞いて、江藤の矛盾した行動にまぁ納得がいかないわけでもなくなった。要は、敵討ちがしたいのだ。
「塚ちゃんはそれでいいのかよ。相手は違う人を好きだってのに」
「心変わりなんていつ起こるかわかんないって」
他人事のように言い放つが、その顔が少し悲しく見えた。僕はこんなに塚本のことを大人だと思ったことはなかった。それに比べて、自分はなんなんだろう。今何かしてしまったら、悲しむのは僕じゃなくて、きっと美咲だ。
「ただ、俺は彼女が自首するまで傍にいたい。先輩はいつだって一緒にいられるんだから・・・・・」
そこまで言いかけて、塚本の口が止まったことに気づいた。彼の視線の先を僕も追ってみる。そして気づいた。
僕たちがトンネルで見たあの顔。それから、江藤の教えてくれた男たちの特徴とよく似た人物が3人。それも、明らかに奴らの仲間じゃないと思われる気弱そうな男が半ば押されるようにして正門から出てくる。
周囲が遠巻きに彼らを見ているところで、大体の想像がついた。
自然と僕の足が動いた。

「なんだ・・・こいつら!!」
気づくと、僕は人のいない公園にいて、1人の高校生の太い腕をひねり上げていた。残りの2人は塚本ががっしりと捕まえている。

その間に、気弱そうな男が逃げていく。
「お前ら・・・・・あいつの仲間か・・・？」
「はぁ？勘違いするなよ。俺はさっきの男と面識なんてない」
ひねる力を強くする。高校生の腕からかみしみしと音がするような気もしたが気にしない。
「いっっ・・・・・」
「二度とこんなくだらないことするな。それから・・・」
言葉はやわらかい。だが―
「それから、今度俺の女に手を出したら―・・・・・・・・・・」

「サンキューな」
歩きながら塚本に礼を言う。本当はこんなに簡単に言うべきことではなくて、ちゃんと言いたかったんだけど、上手く言えない。
「先輩カッキー！俺の女だって！俺絶対言えねーし！」
「・・・それ忘れて・・美咲に知られたら人を所有物扱いするなって言われそう」
なんだか顔が赤面してしまうのではないかと思うほどこっぱずかしい。僕は手で口元を覆ってなんとかやり過ごす。
今回のことは解決したわけではないが、塚本には本当に感謝している。彼がいなかったら取り返しのつかないことになっていたかもしれない。これで心がすっきりしたわけではないが、今は帰ろう。自分の家へ。
足取りは朝よりも軽かった。背中の重荷が少しだけ軽くなったからかもしれない。

マンションに着いてから僕はその異変に気づく。
「・・・・・？」
玄関の向こう、僕の家から妙にテンションの高い声が聞こえる。まさか美咲が1人でべらべら喋っているわけではないだろう。そうして、ある存在に思い至った。

そして、案の定その存在の1人、清水裕太が突然玄関からひょっこりと顔を出した。
「あ、葉山さん！お邪魔してまーす。マミリン、帰ってきちゃったよ！」
僕の部屋から顔を出して慌てて言う裕太。一体僕の家で何をやっているのだろうか。すると、家の中から真実の明るい声が聞こえてくる。
「オッケー！入ってきていいよー」
よくわからないが、裕太に言われるまま僕は自分の家の敷地をまたぐ。そして、見た。
美咲が顔を真っ赤にさせて、メイド服に、ネコ耳なんてつけて、すごく恥ずかしそうに立っているのが。別に美少女系アニメに萌え～ときたことはなかったが、オタクの気持ちを瞬時に理解した気がした。やっべ。やばいっすよ。
傍らに立つ真実が美咲の背中を押して、一歩前に押し出す。何かを言えとジェスチャーしているようだ。
やがて美咲がぱっと顔を上げて、僕を正面から見つめた・・・・が、すぐにしゅんとなってしまった。
「真実さん、やっぱり無理だ」
「何言ってるの！ここは『おかえりなさいませ、ご主人様』だよ！葉山さんと仲直りしたいんでしょ？」
そう言って、くるんと僕のほうを向いて、真実はにっこりと笑った。
「あとは若いお2人だけで～」
まるで見合いの席のように、清水夫妻は軽やかに帰っていく。彼らはこれで2人がちゃんと仲直りしたように思っているようだが、それ以上の効果を持ってきてくれた。知らない間に幸せを持ってくる人たちなんじゃないかと思う。
「孝介・・・あのさ」
「ちょっと待って」

僕はポケットからケータイを取り出して、神業的な速さで写真を撮った。
「美咲のメイド姿なんて一生見られないかもしれないから記念に。やべ、超かわいいし」
彼女はやっぱり頬を赤くして、慌ててネコ耳を取った。
「孝介、あのね・・・こないだは、ごめんなさい」
「こないだって、え？」
何のことを言われているのかわからずに聞き返す。病院に運ばれた事件のことを言っているのかと思ったが、あれは美咲が謝るべきことではない。
「その・・賭けとか、そういうの。孝介に怒られて、あのときはびっくりして逃げたけど、冷静に考えてみて謝らなきゃなって・・・思って」
「あぁ・・・俺もあのときは強く言い過ぎた。それと、体育館で見たのは誤解だからね。何にもないから」
こくんと頷いたのを見て、僕は安心した。っていうか、それを言うためにメイドの格好をしたのだろうか。
嬉しかった。僕は二度と美咲を悲しませないと強く決心した。

第6話　仲直り（後書き）

とりあえずシリアス編終了です。

これから江藤が出てくるかはわかりませんが、
しばらくはライトな内容で行こうかと思っています。

第7話　新婚っていうよりバカップル

仲直りしたその夜、僕は美咲を抱いた。
「いいの？怖くない？」
結婚しておいて今さらと言われるかもしれないが、こないだ美咲は男に襲われた。外傷は軽かったのだが、本人がショックで気を失ったほどだ。正直、僕の怒りもあのときは頂点で下手したら何をしていたかわからない。
彼女は少し戸惑った顔をした。
「あれは・・・襲われそうになったけど、その前に落ちたから何もされてない・・・けど、すごく怖かった」
「・・・・・・」
「相手が孝介だったら怖くないよ」
「・・・うん」

ベッドの上で彼女の首筋にキスをしているとき、ふいに彼女の手が僕の後頭部に回されて、思わずびくっとした。そこは江藤に殴られたときにできた傷だ。たぶんそこだけハゲてると思う。
「ハゲてる」
ストレートに物を言う美咲。僕はうっと思った。
「俺のじーちゃんハゲてるから、将来的に俺ハゲるんじゃないかな。美咲はハゲ好き？」
「嫌い」
ストレートだ。
「俺ハゲちゃうかもよ。それでも好きでいてくれる？」
「・・・孝介なんて嫌いだ。ハゲたらもっと嫌いだ。スケベだし、ヘンタイだし」
「へー・・じゃぁなんでスケベでヘンタイで嫌いな男と結婚なんてしたんだよ。これも俺だと怖くないんでしょ？」

鼻先をくっつけて、美咲の目を覗き込むようにして尋ねる。美咲が頬を赤くして目をそらすのがかわいい。僕は美咲の手と自分の手を重ねた。
「なんか傷つくなー・・・俺美咲のこと大好きなんだけど、美咲は俺のこと嫌いに思ってたんだー。すっげーショック」
ごろんと美咲の隣に横になる。もちろんわざとだったが、彼女は少し慌てたように起き上がった。
「ちっ・・・ちが！ジョーダンだってば」
「じゃぁ、俺のことどう思ってる？」
「・・・・・大好きだよ」
僕は美咲の顔を自分に引き寄せた。

翌日、バイトが休みだったので僕は美咲を連れて動物園に行った。今さらだが、結婚してからいろいろあってデートらしいことを何もしていないことに気づいたからだ。
今日の天気は雲行きが怪しい。天気予報だと、午後から雨が降るそうだ。
「なんか思い出す。1年前もこんなふうに遊園地でデートしたよね」
コアラを見ながら彼女はつぶやく。大きなコアラと少し小さいコアラが一緒に木に登っている。親子だろうか。
「だな。なんか俺ら新婚っていうより、恋人みたいだよな。小さい子供がいればそんなふうに見えるんかな」
僕としては何気なく出した言葉だった。
「子供・・・できたらいいね」
美咲の言葉に少し驚いた。っていうか、きょとんとなった。
「野球チームができるくらい？」
「そんなに無理。大変そうじゃん。理想は2人くらい」
「じゃぁ励みますか」
僕のジョーダンとも本気ともつかない言葉に美咲は笑って、僕の腕を引っ張った。

「ダンシング・コアラだって。おみやげコーナー見に行こ」
そのダンシング・コアラとやらがなんなのかわからなかったが、僕らは恋人同士みたいに手をつないでおみやげコーナーに向かった。

そして、ダンシング・コアラというのは３０センチくらいの大きさで、土台の上で奇怪な動きをするコアラだった。その動きがなんともキモイ。僕には特に惹かれる要素がないのだが、美咲はその動きが気に入ったらしく、それに釘付けになっている。
「タイプかも」
美咲はダンシング・コアラをレジに持っていく。
これがタイプ？僕はコアラをじっと見つめたが、ただ腰を動かして変な動きをしているだけのように見える。美咲のタイプがわからなくなった。

一旦外に出てみると、空が一層暗くなっていた。これは一雨きそうだ。
「やっぱ。雨降らないうちに帰れるかな」
「降ってもいいじゃん。俺、雨ってそんなに嫌いじゃないよ」
「なんで？洗濯物とか乾かないし、じめじめしててやじゃない？」
心底意外そうに美咲は尋ねる。僕はなんとなく空を見上げた。ぽつりと頬に雨粒が当たった。
「晴れたときが好きだった」
「過去形？」
「昔の話だよ。雨が降った後に晴れると、今まで見ていたもんが全部澄み切って見えんの。誰しもあるそんな時代。俺は気分はいつも少年時代だから」
言うやいなや、美咲は腹を抱えて笑い出した。なにがそんなにおかしかったのかはわからない。結構本気なんだけど。
「いや、孝介も普通なんだなって思って・・・」
「なに？俺のことそんな神様的存在に見えてたの？」

「私と結婚するくらいだから、物好きだとは思ってた」
雨がしとしとと降り始める。僕らは建物の中には行かずに、大きな木の下で少し雨宿りをすることにした。
アスファルトの匂いが鼻をつく。そういえば、最近はいろいろなことがあってゆっくりと過ごすときがなかったなぁと今さらになって思う。このぶんだとすぐに雨はやむだろう。空を仰いで雨しぶきを受け止めた。
「孝介」
ふと名前を呼ばれて美咲を見る。彼女も空を見上げている。
そこには虹が広がっていた。
「わぁ・・・虹だ」
思い出した。まだ幼かった頃、何もかもが綺麗に澄み切って見えた頃を。いつのまにか忘れてしまったこの感情。なんだっていきなり今日思い出したのだろうか。
僕は美咲を見る。彼女が隣にいるからだろうか。
「美咲」
彼女と目が合った。僕らは互いの顔を近づけて静かにキスをした。僕が木の幹にもたれて、美咲が少し背伸びするような形で、雨がやむまで・・・

帰宅したときには雨はやんでいた。マンションのエレベーターで2人きりになれたので、なんとなくかっこつけて肩なんて抱いたりしようと考えていたら、1階で突然誰かが乗ってきた。
それだけなら別に普通のことなのだが、乗ってきたのがとてもガタイのいい外国人だったからだ。
「ソーリィ」
丁寧に頭を下げられる。僕は何を返せばいいのかわからなかったのでただうなずいただけだった。
後にこの外国人と関わることになるなんてこのときの僕らは全く

考えていなかった。

第7話　新婚っていうよりバカップル（後書き）

今回は短めでしたね。

割とシリアスな内容が続いたので

今回はありえないほどバカップルもりもりでいってみました。

いやー・・・ほんとにないですよね。

第8話　北海道へ

なぜか僕は今空港で北海道行きの航空券を握り締めているのだが、これには訳がある。

今から1日ほど前。

新婚のくせに何をやっているんだと言われるかもしれないが、バイトで休みをもらって美咲と一緒に1週間くらいぶらぶらと過ごしたり、旅行にでも出かけたりしようかと思っていたら、突然清水夫妻がやって来た。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！！」

今さらだが、呼んでもいないのに来るのはいつものことである。まるで自分の家のように近所のスーパーで買ってきたと思われる寿司を目の前で広げ始めた。

「これ、今日の広告の品だったんだー！私たちのおごりだからジャンジャン食べてね！」

そうして、立派な寿司がテーブルに乗せられていった。しかし、僕も美咲も簡単に手を出そうとはしなかった。短い付き合いだが、彼らが気前のいいときは、絶対に裏に何かある。

「どうぞ！遠慮しないで食べてください」

清水裕太がにっこりと笑って寿司を勧めてくる。

このときにはすでに事が始まっていたのだ。

「孝介君、ちょっと聞いてほしいことがあるんだけど」

僕のことを裕太が名前で呼ぶようになったのは最近だ。結局勧められるがまま、ウニを食べてしまった。テーブルを挟んでキッチン側に美咲と真実が座り、窓側に僕らが座る形になっているが、後で考えるとこの形もおかしい気がしてきた。

「そういうのは聞かずに心の中に留めておいたほうがいいですよ」

「いや。聞かなきゃすっきりしないでずっとモヤモヤすると思うんだ」
仕方なく耳を傾けておくことにする。
「男には勇気が必要だと思いませんか？」
「・・・？そりゃぁ・・」
想定外の質問だったので、少し拍子抜けしてしまった。きょとんとしていると、裕太は嬉しそうな顔になって真実と美咲のほうを向いて、
「マミリン！孝介君も僕に賛成してくれたよ！」
「えぇっ！うそー・・・サイッテーだよ孝介君！」
へ？少しくらいの勇気は必要なんじゃないですか？・・・と言いそうになったところで、なぜか美咲がそれを遮った。
「孝介・・・本当に最低だよ」
「なにが！？」
「今のは浮気を肯定するようなもんだろ！」
「はいぃっ！？」
話が全く見えない。勇気が必要→浮気オッケー・・・話が飛躍しすぎていないだろうか？
「孝介君って元カノとか引きずりそうだよね」
さりげなく言った真実の一言が美咲に火をつけた。
「引きずってないです！今は美咲と結婚したんだし！」
「じゃぁ私と結婚しなかったら引きずってたってことかー！」
そうとも取れる。いや、そうじゃないし。
「ってか、なに言ってんだよ！話が違うだろ！」
「この際だ・・・今まで何人いたのか聞いてやろうか・・・・・」
僕は何も言えずに口をぱくぱくとしていると、あーと声を出してたぶん助け舟を出してくれるであろう裕太が口を開いた。
「確か２人でしたよね？」
助け舟どころか、僕をどん底に沈めるような一言だった。
「清水さん・・！」

「あれ？違いましたっけ？こないだ酔ったときにそんなことを話していたような気が・・・いや、それよりも僕が言いたいのは・・・・・・」

ピンポーン

このややこしいときに玄関のベルが鳴った。

「お父さん！」

なぜか開けたのは真実で、なぜか来訪者は真実のお父さんだったようだ。みんな部屋を間違えているんじゃないだろうか。

しかも、日本人というより・・・クォーターくらいの美形の男の人だった。一見すると、かっこいい俳優さんにも思える。

「ここにいたのか・・・真実、帰るぞ」

突然の申し出にさすがに驚いてしまった。僕は慌てて隣の裕太を見たが、何かに怯えるようにうつむいてしまっている。そういえば、以前彼らはカケオチしたと言ってたような・・・

当の真実は下唇を噛んで何かを我慢しているように見える。僕と美咲は自体が飲み込めずに顔を見合わせた。

「・・・・・・・わかった。帰る」

たっぷり時間をかけて真実はぽつりとつぶやいた。

誰もが驚く中、特に裕太がその反応を見せた。

「でも、帰るのは明日にする。今日は・・・準備とかしたいし」

いつものようなハイテンションではなく、淡々と語る真実の様子がなんだか現実味を帯びていた。

話がこじれてしまい、結局その日は僕の家に裕太が泊まり、美咲が真実の家に泊まることになった。ついでに僕たちの関係もこじれたままだったのだが、裕太が一言も喋ろうとしなかったので僕は何も言うことができなかった。

午後9時頃、僕は外に出て美咲のケータイに電話した。無視されるかと思ったが、案外あっさりと電話に出てくれて、しかも外にま

で出てきてくれた。
ただし、その顔は不機嫌そのものだったが。
「怒ってないよ。過去のこと掘り返すつもりはないし」
僕は意味もなくケータイを開けたり閉めたりをしながら言葉に詰まっていた。明らかに怒ってる人が怒ってないと言っても全く説得力がない。
「でも、テレビとかマンガで、女の子が彼氏の元カノに嫉妬するとか正直そんなのありえないって思ってた、けど・・・」
「けど？」
顔をうつむける美咲。僕はその先が気になって先を促す。
「もーいいよ！」
部屋に戻ろうとする彼女を僕は手で扉をふさいで押しとめる。そのまま後ろから抱きしめた。
友達で嫉妬する女の子は苦手だと言う人がいたが、美咲のようなタイプの人が嫉妬してくれると嬉しく思うのはなぜだろう。
「引きずってないから大丈夫だよ。今の俺は美咲しか見えないし」
そのクサいセリフが恥ずかしかったが、美咲の顔を赤くして背けようとしている様子を見て、たまには言ってみるものだと思った。だから、調子に乗って、
「美咲の初恋の相手に嫉妬するくらい」
そのときの僕の言葉が美咲の悩みのタネになるなんて思ってもみなかった。
「孝介・・・今度迎えに来てよ」
そうして、その言葉が俺を悩ませることになる。

てっきり明日部屋に迎えに来いって言っているものだと思っていた。
しかし、翌朝裕太と隣の部屋に行ってみると、そこに2人の姿はなかった。買い物にでも行っているのかと思って美咲のケータイにかけてみたが、電源が切られていた。

「孝介君・・・！」
慌てた声で裕太に呼ばれる。彼は部屋の中央にある丸テーブルの傍で2枚の紙を見ていた。僕が駆け寄ると、片方の紙を渡された。
『孝介へ　　真実さんと一緒に北海道に行ってきます。たぶんすぐに戻るよ』
昨日、美咲の言っていたことはこのことだったらしい。
僕が事の成り行きについていけないでいると、隣の裕太の様子がおかしいことに気づいた。
「清水さん・・・？」
失礼かもしれなかったが、僕は彼の持っている紙を覗いてみた。それは、真実の手紙らしい。
『実家に帰ります』
ただ一言それだけ。さすがにやばいと思った。
「清水さん！真実さんを迎えに行きましょう！」
「でも・・・僕がマミリンの家に行きたいって言おうとしても取り合ってくれなくて・・・こんな形で行けない」
「このままだと真実さんと離婚ってことになっちゃいますよ！それでもいいんですか！？」
その言葉は裕太に重くのしかかったらしい。今まで情けない顔をしていた彼が、ぶんぶんと首を振って気合を入れなおす仕草をした。僕もようやく安心した。
「俺も行きます。美咲も一緒に行ったみたいなんで」
「孝介君、ごめん。いろいろ迷惑をかけて」
「ほんとですよ。でも、清水さんたちにはすごくお世話になりましたから」
前に美咲とケンカしてしまったことを思い出していた。あのときは2人のおかげで仲直りできたんだ。今度は僕が協力しよう。

そうして今、真実の実家がある北海道への航空券を握り締めているわけだが・・・・・・裕太と真実の夫婦間の仲をとりもつつもり

でいったのに、なぜか僕たち夫婦の関係もまたややこしくなるなんてこのときは思っていなかった。

第8話　北海道へ（後書き）

お久しぶりです！
少し更新に時間がかかりましたがなんとかできました・・・・・

今回は話の分岐点のつもりで書きました。
小説だから思う存分暴れさせてやろうと、ありえない設定を考えています。
うわー・・・どうなるのかなー

第9話　北海道だから（前書き）

今回もいろいろとバカップルです。

第9話　北海道だから

新千歳空港を降りて、バスに乗り換えて約1時間。着いたところは山奥の別荘だった。
僕は一瞬来るべきところを間違えたのではないかと本気で疑った。
「ここが真実さんちですか・・・」
「・・はい。僕も久しぶりです」
ちょうどそのとき、木骨(もっこつ)が露(あらわ)になっている扉が急に開いた。まるで僕たちが来るのを知っていたかのように。
「あれ・・・？どちら様ですか」
現れたのは細身の女性だった。髪の毛を後ろで1つに束ねており、外見から見て20歳後半というところだろう。綺麗な人だった。
「あの、俺たちは・・・」
しどろもどろになって僕が言うべき言葉を探していると、女性は僕を通り越して裕太のことを見て、そしてつぶやいた。
「裕太君？」
「あ・・・お久しぶりです。多恵(たえ)さん」
多恵さん？僕は2人を見比べて状況を飲み込もうとする。だけど、そこには今まで考えてもいなかった大きな秘密があったのだ。

「社長令嬢と執事？」
声を落とすのも忘れて僕は大声を出してしまった。
別荘の中、リビングに案内された僕は、多恵の持ってくるコーヒーを待つ間に清水夫妻の真実を知った。
「最初にマミリンと出会ったのはトンネルだって言いましたよね？そのときに一目ぼれして、執事になったんです」
「へー・・・そうなんですか」
まるでドラマの世界だと思った。お金持ちの娘とそこで働く執事の恋物語。それだけで1つの物語が書けそうだった。

「だから反対されるんですけどね」
結局カケオチするという選択をしたわけだが・・・裕太は僕が言った言葉に心が動かされたらしくて、やっぱり真実に反対されるらしい。そのことで今回はケンカになってしまったのだ。
しかし、真実や美咲は浮気がどーのこーの言っていなかっただろうか。ふと疑問に思ったが、それについては裕太もよくわからないそうだ。
そのとき、コーヒーを淹れた多恵が戻ってきた。僕らはなんとなくへりくだってそれを受け取る。
「真実さんは今出かけてます。もうすぐお帰りになるんじゃないかと・・・」
後で聞いた話だと、多恵はここのお手伝いさんらしかった。彼女はしばらく裕太と簡単なやり取りをした後、改めて僕のほうに向き直った。
「お名前を伺ってもよろしいでしょうか」
「葉山です。清水さんとはお隣同士なんです」
「葉山さん・・・美咲さんのお兄さん、とか」
「いえ。美咲は僕の妻なんです」
なんとなく照れくさい言葉だったが、嘘偽りないことだ。
美咲のいる場所に案内されたのはそれからすぐのことだった。

庭で何をしているのかと思っていたら、美咲は庭の手入れをしている老人の手伝いをしていた。
「あ、孝介」
まるで僕が来ることを予想していたような表情だった。首にタオルをかけ、後ろでポニーテールにしている美咲は、北海道という地に立っているからなのかいつもと違う印象を抱かせた。
「暇だったからお手伝いしてた」
美咲は老人に礼を言われ、ちょうど仕事の区切りがついたところらしかった。

「来てくれてありがとう」
「そりゃぁ清水さんに航空賃出してもらっちゃったからね」
「帰りは私が出すよ。もう今日の最終便買っちゃったから」
「え！？今日帰るの？」
僕の大きな荷物は明らかにここに何日か滞在するのを見込んでのものだった。しかし、美咲は苦笑して、
「関係のない私たちが何日も邪魔しちゃ悪いって思ったんだけど、真実さんがいいって言うから払い戻した」
美咲の言葉を聞きながら、僕はいつになく彼女のテンションが高いことに気づいた。ひょっとして北海道のパワーか？
「美咲嬉しそうだな。北海道だから？」
「それもだけど、孝介が来てくれたから」
そう言って極上の笑顔を見せる。こんな素直な彼女を初めて見た。老人がいなかったら抱きしめていたところだろうが、僕は美咲と一緒に室内に戻るだけに留めた。

「そういえば、真実さんはどう？行くときは怒ってたんだよな？」
「あぁ、真実さんか」
美咲は急に思い出したかのような口ぶりだった。
「あの2人なら大丈夫だと思うよ。たぶん真実さんの勘違いだと思うから」
「・・・？どういう意味？」
「真実さんは清水さんが浮気したって思ってるんだよ。でも、あの清水さんが真実さん以外の女の人と浮気なんて考えられない。今頃誤解が解けていつものテンションに戻ってるんじゃない？」
「はは・・・そんなまさか」

そのまさかだった。
リビングに戻ると、いつのまにか戻ってきていた真実が多恵がいるにも関わらず、いつものラブっぷりを発揮していたのだった。

「やだーもう。私ったら勘違いしちゃったんだー」
「そうだよ。僕がマミリン以外の人なんて考えられないよ。たまたま掃除のおばさんと会話しているときを見ちゃったんだよ」
「ユウちゃん、だーいすき・・・」
そのまま抱き合ってキスしそうな勢いだったので僕は慌てて咳払いをした。しかし、聞こえてないのか自分たちの世界に入っているのか、まるで無視して2人はキスをし始める。
多恵が困ったように笑っていると、僕たちに気づいて笑顔を向けた。
「一件落着のようです」
「そのようですね・・・」
一気に疲れた。僕らがここまで来ることに意味があったのだろうか。
後は真実の両親を説得するだけのようだが、今の2人のテンションだったら清水の舞台から飛び降りても無傷でいそうだと思った。

僕と美咲は真実の厚意に甘えて、部屋の1つを貸してもらえることにした。
「いい所でしょ、ここって。この先に夜景の綺麗な場所があるんだよー！お世話になったお礼に、そこの場所教えてあげる」
教えられたのは、国道をちょっと脇にそれた林の中だった。そんなにうっそうとしていないので、夜でも月の明かりさえあればなんとか進めるくらいの林だ。その先に木が全く生えていない所があるそうだ。そこが穴場らしい。
「わ・・・ほんとだ。すごい・・・」
僕もこんなに星がちりばめられている空を見たことがなかった。星が降ってきそうとはこのことを言うのだろう。
ふと、隣にいる美咲を見た。彼女の横顔は星に負けないくらいきらきらしているように見えた。これも北海道パワーだろうか。
「世界は広かったんだ」

「なにそれ？」
僕は尋ねる。
「こんなに綺麗な星、日本で見れると思わなかった」
「俺も」

その後、どういう経緯で僕らがキスをしていたのかはわからない。くどいようだが、北海道パワーなんだ。っていうか、ただの思い付きだ。
軽く唇を合わせるだけのものから少しディープなものまで、僕は美咲の表情の変化を見ていた。いつのまにか手が美咲の胸にあるところも星が綺麗だから・・・・・・か？
そんなスケベなことをしていると、急に背中に悪寒を感じて振り返った。
誰もいない。すごく嫌な感じがしたんだが・・・怖いくらいの・・・
「こ、うすけ・・・？」
緊張して縮こまっている美咲が不思議そうに尋ねてくる。
「や、なんでもない」
そのとき、美咲の細い指が僕の前髪に触れた。なぜか僕の額は冷や汗をかいていた。
僕は美咲の手を取ってもう1度振り返って・・・・・そして見つけた。
「誰ですか」
そこには木に隠れるようにして立っている人影があった。

第１０話　２つのキス

月夜に照らされてそこに立っていたのは、見知らぬ男の人だった。
「誰ですか」
僕はもう１度尋ねる。今、美咲とキスをしていたところを見られたことに対する恥ずかしさを隠すように強気の態度を取った。
「いや、あの、覗くつもりは全くなかったんです・・・・・」
男の眼鏡が光る。両手を振ってその意思がないことをアピールしている。
しばらく沈黙が続いた中、最初に口を開いたのは・・・・・美咲だった。
「え・・・っと、宮本君？」
「は？」
「やっぱり武藤かー！久しぶり・・・・・ってごめん！邪魔しちゃった」
美咲の旧姓を語るその青年は、眼鏡をかけたいかにも好青年という男だった。

「俺と武藤は中学までの同級生なんです」
あの後すぐに走り去ろうとした宮本とかいう男を引き止めたのは美咲で、今こうして別荘までの国道を歩きながら彼は語りだした。
「でも、途中で宮本転校してっちゃったよね。北海道なんて知らなかったけど」
「うん。おばあちゃんの調子が悪くなっちゃって。そういえばちゃんとした挨拶もなく突然転校したっけ。みんな元気にしてる？」
「いきなりの転校でみんなかなりショック受けてたよ」
当時のことを思い出しているのか、美咲は懐かしむように目を細めて話す。
「武藤は？」

「もちろんショックだったよ」
なんだかいい雰囲気になりそうだったので、僕は慌てて何か言おうと考えたが、僕が言うよりも先に宮本が口を開いた。
「でも今は仲がいい彼氏と一緒で羨ましいよ」
美咲はさっきのキスを思い出したのか顔を赤くして下を向く。
「びっくりした？恋愛とかに無関心そうだった私が男の人と一緒にいて」
「んー・・・っていうよりも、彼氏さんが羨ましいかな」
意味深なセリフを残して、宮本はじゃあねと去っていってしまった。
とりあえず、一言も話していないが、僕もこの場にいます。

翌朝、いつもより早くに目を覚ました僕は隣の美咲を起こさないようにベッドを出て、外の空気を吸いに行った。
別に美咲の昔の友達と話すことは初めてではない。ただ、なんとなくわかってしまうのだ。懐かしの男友達のほとんどは美咲に恋をしていた、あるいはまだしているということを。
それに昨日感じた嫌な予感。昔から変な勘が働くのだ。

「おはようございます」
ふいに背後からかけられた言葉。振り返ると、多恵の姿があった。
「あ、おはようございます」
「朝早いんですね。昨日はよく眠れなかったんですか？」
「いえ、そういうわけでは・・・」
僕は言葉を探して黙り込む。
ふと、多恵の顔が目前まで迫ってきて・・・一瞬キスをされるのかと思った。
もちろんそんなわけじゃなく、多恵は僕の前髪についたごみを取ってくれただけだった。
「・・・・！」

「すいません！ごみがついていたので・・・」
なぜだか多恵は顔を真っ赤にさせて、その場から立ち去っていった。

僕が部屋に戻ると、美咲がすでに起きていて着替えを終えたところだった。
「おはよう。もう起きてたんだ」
「ああ。早く目が覚めたんだ」
僕は答えながら、ふとあることに気づいた。
「美咲・・・香水つけてる？」
「うん・・・まあね」
どこか挙動不審な態度を取る美咲。普段香水なんてつけないのに、なんだって今日はつけるのだろうか。
彼女が僕の傍を通り過ぎるとふわっと花の香りがした。

そして、朝ごはんを食べ終わってから何気なく部屋の外を見ると、美咲が宮本と一緒にいるところを僕は見た。

前にも似たようなことはあったが、今回もたぶん誤解だろう。たぶん・・・
僕は清水夫妻とリビングでテレビを見ながら自分に言い聞かせていると、急に2人が真剣な面持ちで話しかけてきた。
「孝介君、実は僕たちここに暮らすことにしました」
「え・・・じゃぁあっちの家はどうするんですか？」
「マミリンのお義父さんに話したら、ここで一緒に暮らすんなら僕たちの結婚を認めてくれるって言ってくれたんです。だから・・・・・僕たちのカケオチはこれで終わりです」
裕太はどこか安心したような表情をしていた。
そうか、2人はちゃんと将来について話したんだ。そして認めてもらえたんだ。

僕は一瞬自分が考えていたモヤモヤを忘れて、自分のことのように嬉しくなった。
「よかったじゃないですか。これでずっと一緒にいられるんですね」
「うん！孝介君たちのおかげだよー！」
真実が嬉しそうに話す。
「私たちにとって、２人は理想の夫婦だったよ！本当にありがとう！」
この２人のことが解決してよかった・・・僕は本当に心からそう思った。

＊

「それにしてもすごい偶然だよね。武藤がこんな所にいるなんてびっくりだ」
宮本に言われて美咲は少し迷って笑う。そして、どう切り出そうか迷っていた。
「またこうやって話せて嬉しいな。いつ地元に帰るの？」
「もうすぐ帰ると思う・・・」
「そっか・・・・・」
美咲は少し俯いてから、すぐに顔を上げた。
「宮本・・・私、もう武藤じゃない。葉山っていうんだ。昨日いた男の人と結婚した」
「え？」
「だから、今度会ったらあの返事をするって言ってたけど、ごめん。宮本とはつきあえない」
「結婚・・・・・そっか、わかった。でも、聞きたいんだ。武藤・・・いや、葉山は今幸せ？それと、あのときのキス、まだ覚えてる？」
「キス・・・？」
美咲が疑問に思っていると、突然宮本が近づいてきて、そして、そして―・・・・・

＊

僕はやることがなかったので、昼頃、多恵の手伝いをすることにした。

彼女はここで住み込みの手伝いをしているらしく、今も2階の部屋の電気を変えていたところだった。

「多恵さん、俺も手伝います」

あとで思った。僕はこのとき手伝うべきではなかったということを。

「ここの家事全般を1人でやってるんですか？」

「まさか。真実さんのお母様と一緒にやってるんですよ。ここで働くのはとても楽しくて」

と、そのとき階段を降りていた多恵が段を踏み外して落ちそうになってしまった。僕は慌てて彼女の腕を取ったが・・・遅かった。

がしゃーん

派手に電球が階段の下で割れ、僕らは階段の途中で中途半端に落ちそうになっていた。なんとか多恵を落とさないで済んだようだ。

「大丈夫、ですか？」

なんとか話しかけると、多恵は小さく震えながらこくんと頷いた。

僕は腕に痛みを覚えたが、それを我慢して起き上がる。いや、起き上がろうとした。

「わっ」

そのままバランスを崩して、頭から真っ逆さまに落ちてしまった。

「葉山さん！」

多恵の声が聞こえた。

＊

何かすごい音が聞こえて、美咲は家に戻って音のするほうへ行ってみる。

そこで見てしまった。

階段の下で苦痛の表情で倒れている孝介の姿と・・・・・・・・・

その傍でひざまついている多恵の姿を。

多恵が自分の大切な男にキスをしているところを。

第１１話　帰路

全身の苦痛に耐えて目を開けると、美咲と真実の姿があった。
「孝介君、大丈夫！？」
僕は上半身を起こしてみて、まだ全身が痛むが大丈夫だと伝えた。
「や、大丈夫・・・そういえば、多恵さんは？」
「大丈夫みたいだよ。今救急箱取りに行ってる」
そのとき、美咲が何か難しいことを考えるような、そんな顔をして僕を見ているのがわかった。
「美咲、どうした？」
「なんでもない」
たったそれだけ。美咲は僕を見ることなく、顔を背けてそう言った。

結局右手首をひねっただけの軽症で済んだ。
僕は部屋に戻り、腕を動かしながらその違和感に首を傾げた。ひねらなくても痛い。
それから・・・あのとき、誰かにキスされたような・・・・・・がちゃっ
ドアが開く音と共に僕は現実に引っ張り出された。驚いてそちらを見ると、美咲が仏頂面で入ってきた。僕は唐突に美咲が香水をつけていたことを思い出した。
「孝介・・・大丈夫？」
「うん。なんか最近こんなんばっかだな」
美咲が僕の傍にすとんと座る。いい香りがした。
「なんで今日香水つけてんの？」
「真実さんにもらった。少しおしゃれしたほうが女らしくなるのかなって」
「そんなんしなくても・・・十分・・」

かわいいと言いかけてやめた。さすがにそれは恥ずかしい。
なんとなく照れくさくなって、慌てて言葉を探した。そうだ、昨日の男とのことについて聞いてみたいんだけど・・・束縛が強いって怒られるだろうか。そういや、さっき・・・・・
「・・・！」
驚いた。
唇に何かが当たったと考えたら、美咲がキスをしてきたからだ。突然のことに固まってボーゼンとしてしまった。
それも一瞬で、美咲は顔の角度を変えてもう1度キスをしてきた。
そして、我に返った僕は唇を離した美咲に自分からキスをしようと思ったとき、なぜか、この場面で、頭突きをしてきた。
ごーーーん
例えて言うならこんな音。何が響いたのか知らないが、涙が出そうになるくらい痛かった。
「なにすん・・・！」
「別れないからな」
「はぁ？」
「あんな理不尽な理由で別れないから！そりゃぁ大人の女のほうがいいだろうけど、私たち結婚してんだよ！？あれじゃぁ浮気だって言われてもおかしくないんだからな！」
いや、待って。全く意味がわかんないんですけど。
美咲は乱暴にドアを開けて、部屋から去っていった。

僕らが北海道を後にしたのは翌日の午後だった。
昨日の美咲の様子を不審に思ったが、あれから彼女は何も言ってこなかったので結局そのままになってしまった。
空港まで真実と裕太の2人が見送りに来てくれた。
「またすぐに遊びに行くからね！」
「たまには遊びに来てくださいね！」
2人して同じことを言っているような逆のことを言っているよう

な微妙だったが、僕らは笑顔で見送られた。なんだかんだ言って、この2人には世話になったのだ。

そして、僕にとって気になるのは、美咲が久しぶりに再会したと思われるあの男の存在だった。

「あの宮本って人には挨拶しなくてよかったの？」

結構意地悪な質問だったが、何を怒っているのかわからず、逆にこっちもいい気分ではいられないのだ。

しかし、美咲は少し困った顔をしてこくんと頷いただけだ。

「あの人、お前のこと好きだったと思う」

お前と言ったのは初めてかもしれないと思った。意味不明だったが、今目の前にあの男が見えてから、僕のテンションは下がり始めていた。

「昨日はごめん。でも後悔はしてないから」

最初の一言はそれだった。宮本は本当に申し訳なさそうな顔をしていたが、後悔はないという話も本当だろう。その内容が気になるところだが。

「なんかあったの？」

隣にいる美咲に尋ねたつもりだったが、答えたのは宮本だった。

「キスしようとしたんです」

それを聞いた瞬間、僕は殴りかかろうとしてしまった。相手の胸倉を掴んで・・・・・美咲が僕の右腕をしっかりと掴んでいたからやめた。

僕は乱暴に宮本を放した。

「殴られることを期待したんです・・・結婚相手のあなたに殴られたら諦めがつくかなって。昨日、美咲さんにはしっかりと拒絶されました。右ストレート1発です。それに、あなたが好きで好きでたまらないとも言われました。悔しいです・・・・・」

宮本は少し微笑む。

「美咲さんを泣かせたら許しませんから」
「ハイ・・・・・」
僕は目を丸くしながら答えた。とりあえず、美咲を泣かせないようにしようと誓った。

宮本が去った後、僕は隣に座る美咲をちらりと見た。彼女は俯いていて、僕に顔を見せないようにしていることがわかった。
僕は少し考えてから、彼女の髪の毛をぐしゃぐしゃと撫でた。
「美咲が昨日言ってたのは、俺が多恵さんとキスしたことだろ？」
その言葉に驚いて美咲が顔を上げる。
「ま、まさか・・・わざと知らないフリしてたのか！？」
「なわけないって。あのときは俺も体中痛くてやばかったから、全然考える余裕がなかったんだよ。後で考えて、なんかいつもと感触が違うよなって思った。で、あの場にいたのは多恵さんだけだった」
「そうだよ・・・・・多恵さんとどういう関係なんだよ・・・」
「なんもない。美人で優しい人だとは思うけど、なんであんなことしてきたのか正直わかんない」
そこまで言って、僕は昨日美咲が別れないと言ったことを思い出した。
そうか、理不尽な理由ってこれのことだったんだ。
「ごめん。美咲以外の人とキスしないって約束破っちゃったな」
「いいよ、もう。不可抗力だったし。だーけーど」
そう言って、突然右手を振り上げたかと思うと、思いっきりデコピンをされた。ばちんといい音がしてほどほどに痛くなる。
「浮気だったら許さないから」
僕は苦笑してこくんと頷いた。

そういえば、家に帰ってきてからやることがいっぱいあることに気づいて急に現実に引き戻されてしまった。
まずはたまった洗濯物。清水夫妻が来た日のままになっていて、

部屋の片付けもしなければならない。
そのときふと思った。あのうるさい夫妻がもう隣にはいないということに。
まるで台風のような人たちだったが、僕らは彼らのことが好きだった。
「ちょっと静かになるかもな」
「そうだね」
美咲の声も少し寂しそうだった。

だが、静かな生活はそう長くは続かなかった。
隣の部屋にはすぐに誰かが越してきたのだ。正確には、真実の知り合いの外国人らしく、家を引き払うことなくそのまま住みついていた。
いかつい顔の外国人とその奥さんである日本人。典型的なカカア天下だ。
「ハニーちょっと待ってくれよ！愛してるよ」
「わかったから、ごみ捨ててきてよ！あぁぁ・・・またプラスチックと一緒にしてるー！今日は可燃ごみの日なのよ！分別の意味わかってるの？ジャック！！」
「もちろんだよ、ハニー」
丸聞こえの会話。うるさい日常はまだ終わりそうにない。

変わらずうるさい日常。少しずつ変わっていく日常。
僕たちにも変化が訪れた。

第１１話　帰路（後書き）

あいかわらずありえないです。

もう少しだけ２人のバカっぷりにお付き合いください。

次回、ついに美咲に・・・・・？

さぁどうなるんでしょうか？笑

第12話　妊娠

時は流れ、季節は冬になっていた。
今年はまだ雪は降っていないが、例年よりも寒い冬になりそうだと天気予報で言っていた。

僕は玄関でほどけかけた靴ひもを結んだ。
「じゃぁ、行ってきます」
「うん。行ってらっしゃい」
いつものように出かけようとする僕を美咲が見送る。だけど、今日はなんか違った。
「・・・調子悪い？」
「え、なんで？」
「や、なんか元気ないような・・・・・」
美咲は少し黙ってから何かを考えるような仕草をした。髪の毛を耳にかけ、首を傾げた。
「昨日からだるくて・・・なんもやる気がしなくてさ。でも、今からちょっと寝れば治ると思う」
「・・・ん。無理すんなよ」
僕は彼女の頭をぽんぽんとなでて家を出た。

1月の空は寒い。僕は自転車をこぎながら、本格的に車が欲しいと考えていた。
でも、今は節約しなきゃだな。そのためにもっと働かなきゃだ。
「おい、孝介ー！」
急にそんな声が聞こえてきて、僕はこいでいた自転車をとめた。
懐かしいこの声。
「三田！久しぶり！」
サークルが同じだった三田篤志(あつし)だ。最近はサークルを引退したた

め会うことはなかったが、バイトに行く途中で会うなんて初めてだった。
「めっずらしーな！三田の地元ってここじゃないだろ」
「ああ。彼女んちに行く途中」
三田はへっへーと子供みたいに笑って答える。たぶん新しくできた彼女だろうとなんとなく思った。
「元気そうだな」
「お前もな。結婚生活はどうよ？独り身が恋しくなったんじゃねぇの？」
「俺、美咲一筋だからそんなこと考えないよ」
僕はマフラーを巻き直した。こんなふうに会話するのが久しぶりでなんだか懐かしい。やっぱり持つべきものは友達だと思う。
「じゃぁな、三田も結婚することになったら教えろよ」
「孝介もな。子供できたら教えろよ」
そのときは笑って僕たちは別れた。

帰宅すると、美咲は朝よりも元気そうだった。
「よかった。治ったのか」
「まぁね。別に病気とかじゃないと思うし」
なぜか美咲は笑顔だった。
「なんかいいことあった？」
「ん・・・もしかしたら、こう・・・・・・や、なんでもない」
こう？この後に続く言葉がわからない。少し考えてみたが、やっぱり思い当たらなくて尋ねると、美咲はなんでもないと言うばかりだった。

僕がその事実を知るのは翌日になる。
昼過ぎに大学から帰ってくると、美咲が自転車をこいでいるのが見えた。買い物の帰りだろうかと思って、僕も走って追いかけると、美咲が段差につまづいてバランスを崩して転んでしまった。

「美咲！大丈夫？」
「あれ、孝介。おかえり」
自転車を起こしながら美咲は立ち上がった。
「ごめん。考え事しながらこいでたから・・・」
「気をつけろよー」
僕らはそのまま一緒に帰ることにした。
「どっか行ってたの？」
僕としては何気ない質問のつもりだった。だけど、美咲は一拍考えてからおもむろに答える。
「病院行ってた」
「え・・・どっか悪いの？」
「ううん。そーじゃなくて」
美咲はかぶりを振って否定する。
「あのさ！コウノトリ来た！」

「私、赤ちゃんできたみたい」

どのくらいかしばらく固まった後、美咲が僕の反応を見るようにちらりと顔を上げた。
「顔・・・赤いよ」
ぎょっとなって僕は手で顔を隠した。
「だ・・・赤ちゃん、俺らの・・・マジ！？」
「マジ」
僕の中で何かが熱くなるのを感じた。赤ちゃん、僕と美咲の子供。すげー・・・すげーよ。
「すっげー・・・すっげーよ。マジ嬉しい・・・・・え、今何ヶ月？」
「2ヶ月だって・・・・・そのくらいだとは思ってたけど」
「なんで？」
「なんていうか・・・妊娠したなって思ったときが1回あった。た

ぶんそのときの・・・」
美咲は真っ赤になって説明する。その仕草がかわいかった。
言葉にならない喜びと恥ずかしさが込み上げてくる。今、美咲のお腹の中にはもう1人の命があるんだ。
僕らはもうすぐ親になる。
「孝介・・・嬉しい？」
何かを伺うような表情で美咲は尋ねる。僕は笑顔で頷いた。
「信じらんねーくらい嬉しい・・・」
美咲は僕を見て、そしてにっこりと笑った。
「私も！」

そこで僕ははっとした。そういえば、さっき美咲は自転車で転んでいなかっただろうか。急に恐ろしく感じてしまった。
「美咲！！もっと安静にしてろよ！」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ！」
なぜか不安になった。

ベッドに寝転び、僕は美咲のお腹をおそるおそる触れてみた。その上に耳を当てて何か音が聞こえないか耳をすましてみる。
「まだなんにも聞こえないんじゃない？」
美咲が照れくさそうに言う。
「こういうのやってみたかったんだ」
両親に子供のことを話すと、すごく喜んでくれた。生まれてくる子は多くの人に祝福されて生まれてくるだろう。
「パパだぞー」
そのとき、美咲がぷっと吹き出すのがわかった。逆に僕はふくれてしまった。
「美咲だってママになるんだぜ？」
「そうだけど、孝介がパパでちゅよーとか言って赤ちゃん言葉使うとこ想像しちゃった」

言われて僕も想像してしまった。そのうち女の子だったら、パパキモいって言われるんだろうか。
僕は美咲の顔を覗き込んでみた。
「どうした？」
「ううん。不安じゃない？」
それは美咲の出産に対する気持ち。僕は確かめてみた。
「そりゃぁ・・・痛そうだし、不安はあるけど・・・・・ウチの家系はお産が軽いほうだって言ってたし、それに、やっぱり」
美咲は自分のお腹に触れる。
「この子に会いたい。私たちの子供だもん」
僕たちの子供。なんだか新鮮な言葉だった。
ずっとどきどきしっぱなしだ。

僕らに子供ができた。

第１２話　妊娠（後書き）

美咲が妊娠しました。
なんか自分の孫に子供ができたような気分です。
この先彼らはどうなるんでしょうか・・・？

第１３話　新たな生活

家に三田が遊びに来たのは、妊娠したとわかってからすぐのことだった。
「ここが愛の巣ねぇ・・・」
まるで不倫でもしているかのような言い方で三田は室内を物色する。
「今日は美咲さんいないんだ？」
「ああ。友達んちに行くってさ」
ふーんと興味なさそうに頷き、今度は僕の寝室を開けようとする。さすがにやばいと思って僕は三田の前に立ちふさがった。
「ここは！入るな！」
「へー・・・」
どんな意味で捉えたのかは知らないが、あきらめてくれたようなのでひとまず良しとした。
先日、子供ができたと三田に教えると、「よし！今度遊びに行く」という話になり、今に至る。三田が来るのは初めてだった。
「順調そうだな」
ニヤっと笑って尋ねる三田。
「まぁね」
「彼女、昨日してくれたんだ」
「～～～そうだよ。だから入んじゃねーぞ」
やっぱり寝室に入ってほしくない理由に気づいているようだ。僕は決まり悪そうに冷蔵庫を開けた。
「いいねぇ。俺の彼女は完全受け身でマグロ状態だから、頼んでも絶対してくれないし」
「あれが好きな人なんていねーんじゃねーのー」
男同士のスケベな会話が繰り広げられる。わかる人にしかわからないネタ。

冷蔵庫に何もないとわかった僕は三田に向き直った。
「ごめん。今なんもないから、どっか食べ行こうぜ」
「おー」
寒空の中、僕らは近所のラーメン屋に出かけた。

たまには男同士で遊びに行くのも悪くないと思った。
三田は就職の話とか、今つきあっている彼女の話をする。普段は聞けない情報だから、僕も興味深かった。
「孝介に子供ができたって知ったサークルの何も知らない女の子たちは、ショックがって最近顔出さないんだってよ」
「なんだそれ」
僕は箸で麺を掴みながら笑う。
「1年の女子は知らないじゃん。密かにお前モテてたの知らんかったの？」
「ありえねー」
三田がどこまで本気なのかはわからないが、それ以上この話題をしてくることはなかった。
「三田、今日バイトか？」
「ああ。もうすぐ。なぁ、今日は無理だけど今度飲みに行こうぜ。サークルの面々誘って」
「いいな、それ」
「よっしゃー決まり！じゃっ！バイトあっから」
今思えば、三田は何しに来たのだろうか。まさかこれを言うためだけに来たわけじゃないだろう。
ふと、テーブルの上に置いていった三田のお金を見た。
2人分のラーメン代。まさかこれを懐妊祝いか出産祝いにするつもりじゃないだろうな・・・・・

帰宅すると、マンションの下の郵便受けの近くで美咲を見かけた。
「あれ？もう戻ってたんだ」

声をかけると、美咲がこっちを向いて笑顔になった。
まだマタニティは着ていないが、意識してかワンピースを着ている。やっべ、かわいい・・と新婚どころか中学生の少年みたいな感想を抱いてしまった。
「うん。買い物行かなきゃなって思ってたから」
「じゃぁ、俺も行くよ」
僕は美咲のバッグを持った。

近所のスーパーへ行き、僕がカートを押して、美咲が商品をかごに入れていく。
こういうのをやっていると、いつもより夫婦だと感じる。
僕は生まれてくる赤ちゃんのことを考えた。美咲に似ればきっと端正な顔立ちの子になるだろう。僕に似たら・・・？
「美咲、俺ってブサイク？」
「はぁ？」
いきなりなんだというような顔で美咲は振り返る。
「もし生まれてくる子供が俺に似たらどうなるかなぁって・・・」
「・・・・孝介って自分がモテるって自覚がないんだな」
それは美咲のほうなんじゃ・・・と思ったが、
「私に似たら、きっと性格ひねくれた子供になるよ」
「・・・・・・」
「そこ否定しろよ」
むっと怒り出して1人で歩き出す美咲を追いかけた。
ひねくれたというよりは・・・素直になれない人になるかもしれないと思いながら。

そして、月日は流れていく。
4月。僕は新入社員になっていた。

「葉山孝介です。よろしくお願いします」
僕が入社したのは、保険会社だ。僕専用のデスクが与えられるのを見たときは正直感動した。
「さっそくだけど、これコピーしてきて」
数枚の紙が束になった紙を渡されて、少し困った。まずコピー機の位置がわからない。目で必死になって探していると、
「コピー機はあれだよ」
と、若そうな女の人が教えてくれた。
「ありがとうございます」
「やり方も教えてあげるね」
優しそうな人だと感動した。何もわからない状態でいきなりコピーの役割を回されるなんて思ってもみなかったからだ。

「私、秋野知美っていうの。一応、葉山君より2年先輩だから、困ったことがあったらなんだって聞いてね」
「あ、ありがとうございます」
「これ、私のアドレスと番号」
どこから取り出したのか、メモ帳に丁寧な字でアドレスと番号が書かれている。
「じゃぁ、後で送ってもいいですか」
「どうぞ」
そのときは、ただ親切な人だなぁとしか考えなかった。

コピーを終えてから席に戻ると、僕の隣に座っていた磯崎（いそざき）という30代くらいの男が、回転イスを移動させて僕のほうへ近づいてきた。
「今日から俺がお前の世話係りみたいなことをやるんでよろしく」
「はい！よろしくお願いします！」
「にしても、葉山、入社早々やっかいなのに気にいられたな」
「どういう意味ですか？」

磯崎は内緒の話をするように手で口元を隠して囁く。
「さっきお前にコピー機の場所を教えた女にゃ気をつけろ。あいつはやべーぞ」
意味深な言葉。僕は聞き返そうとしたが、すぐに磯崎は自分の席に戻ってしまったので結局聞くことができなかった。
僕の社会人生活はこうして幕を開けた。

第１３話　新たな生活（後書き）

孝介と三田の会話なんですけど・・・
自由に考えてくれて大丈夫です。
本当にわかる人にしかわかりません。

そろそろ物語は終わります。
結末もぼんやりと考えています。うーん・・・・

番外編　出会い（美咲視点）（前書き）

いつか書こうと思っていた美咲視点の出会い。
なぜここで？と思うかもしれませんが、
まぁ長い目で見てくれると嬉しいです。

これが作者の性格だったりします・・・

番外編　出会い（美咲視点）

今思えば、あのときの私を救い出してくれたのは、他でもない孝介だったんだ。
親の決めた婚約者なんだから仕方がないと半分あきらめていたところもあった。
だけど、知ってしまった。自分が幸せになりたいと思っていることを・・・・・あの人に会ってから。

最初に頭に血が上ったのは、妹とおそろいで買ったマグカップを婚約者の岸本に割られたことだ。あのときのあいつは謝りもしないで、
「こんな所に置きっぱなしにしておくのが悪いんだ」
と言い放った。さすがにキレそうになったが、なんとか堪(こら)えた。もしここで私が怒ったら、じーちゃんや父さんの会社に何かするとか言いかねないからだ。
根本的に何かがおかしい。
古臭い言い方かもしれないが、代わりの兵士はいくらでもいる・・という考え方の持ち主で、私は岸本が大っっっっっっっっっ嫌いだった。

「美咲、もう1度考え直そう。あんな男と結婚なんてしたくないだろう？」
もう何度目かのじーちゃんのセリフ。
「いいって。決めたことなんだから今さら変えたってしょうがないよ」
たぶんこの話をするために、じーちゃんは私を誘ってコンビニへ行こうとしたのだろう。わかっていてついてきた。
口ではしょうがないと思っていながらも、心のどこかでは婚約が

解消されることを願っていたからかもしれない。
「・・・・・好きな人はいないのかい？」
「そんな人今までできたことないよ」
本当のことを言うと、初恋がいつだったかなんてわからない。物心つく前に恋愛をしたような記憶があるが、はっきりと認識していないため、恋なんてしていないと思っている。第一、こんな性格破綻者を好きになる物好きがどこにいるのだろう。
そんなことを考えているうちにコンビニにたどり着いた。
「え？じーちゃん入んないの？」
「ここで待ってるよ。好きなものを買ってきなさい」
じーちゃんがガラの悪い男たちに絡まれたのはそのすぐ後のことだった。

日頃のうっぷんもあったんだろう。
じーちゃんに絡んでいた男たちを背負い投げで投げ飛ばした後、逃げるように走っていく男たちを、私は容赦なく追いかけた。
やられたら１０倍返し。これがじーちゃんのモットーだ。
トンネルまで追いかけたとき、男の１人が転んで倒れた。尻餅をついてそれでも逃げようとする男を蹴り飛ばした。
そのときだった。胸倉を掴んで殴り飛ばそうとしたとき、その右手が誰かによって掴まれてしまった。追ってきた男たちじゃない。
誰だ？見ると、私にとってまったく知らない男がいつのまにかそこにいた。
意外に若そうで、いや、大学生か？強い眼差しが印象的な男を一瞬で観察してから、しかしすぐに敵だと認識した。
「・・・・・っ！」
右ストレートは簡単に避けられてしまった。
あれ？うそ・・・
今度は意表をついて蹴りを入れてみる。しかし、それも間一髪で避けられてしまった。

その間に男たちが逃げていくのがわかったが、追うことができなかった。初めて自分の蹴りを避けられたことにショックを受けたから・・・・・

「邪魔すんな」

大学生の顔面を狙ったつもりだったが、やっぱり避けられてしまった。

「あんたこそ何してんだよ！暴力だろ！」

それが、大学生の第一声だった。確かに正論だ。

私はこれまでの事情を簡単に説明したが、頭の中ではなぜか今まで感じたことのないイライラするような感情が芽生えてきていた。そして、最高にいらだったのは、大学生のこの一言。

「女の子なんだから3倍返しみたいなことするなって言ってんの」

やっぱり世間の男は、女に思わず守ってあげたいような幻想を抱くのだろう。

最高にイライラした。

そして、じーちゃんにタダでご飯を食べさせてあげるからと連れてこられた料亭で、いきなりお見合いになった。しかも、あの大学生、葉山孝介と。

最初は抹消したい記憶だったので、思い出すのに苦労したが、1度思い出すとあのときの感情が次から次へと蘇(よみがえ)ってくる。たぶん嫌いだと思われるしいたけを箸で避けているのを見ているだけでも腹が立ってきた。

普段は岸本の暴言にも耐えられるのに、この男は逆に気になってしまう。

そうして、思いついたのが腕ずもうで決着をつけることだった。力勝負ならそうそう負けない自身がある。

「腕ずもう・・・？」

「早くしろよ。まさか負けるのが怖いのか？」

軽く挑発すると、孝介はすぐに乗ってきた。
楽しかった。この男と決着をつけるために自分から腕ずもうをけしかけたはずなのに、なんでだろう・・・イライラしていたはずなのに、繋いだ手のひらが熱かった。

やばい・・・こんな感情・・・・・思っちゃだめだ。
だめなのに・・・・・・

1回デートしてもらえば、全部すっきりとあきらめられると思った。
きっとこれを楽しい思い出にできれば、岸本と結婚してもずっと耐えられると思った。
だけど・・・・・だけど、

「ほんっと自分勝手で、すぐ暴力ふるうし、非常識だし、こんな女ごめんだよ・・・・・もう最後にしたい。選べよ。その大会社の息子と結婚して後悔するか、ここにいる人全員ぶっ倒して自由になるか・・・・・俺を選んで一生後悔するか」

「俺を選べ！美咲！」

見合いで孝介と再会したのは、じーちゃんが図ったからだった。
私が孝介をいろいろな意味で気にしていたのを見抜いていたらしい。
私は知った。
人を好きになるということを。孝介が好きだということを・・・・・

「おかえり」
仕事から帰ってきた孝介を出迎える。

「ただいまー。あぁぁ・・お腹すいた」
「今日鮭だよ」
「おっ！やった」
就職してから、まだ慣れない仕事に孝介は苦労しているようだ。大学生で結婚したから、金銭面にやはり問題があるのだ。それにもうすぐ家族がもう1人増える。
正直、昔は子供がほしいなんて思ったことがなかった。だけど、結婚してから急に望むようになったのだ。
出産予定は9月頃だ。お腹も大きくなってきている。
「・・・・・この子と美咲のために頑張んないとな」
「体壊すなよ」
「『ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・し？』って言ってくれたら大丈夫だと思う」
「言うか！」
改めて思ったこと。私を好きになる人はやっぱり物好きだ。

最終話　やっぱりおしどり夫婦へ

「なに？愛のメール？」
「そうかも。秋野さんとかいうやばい女の人に目ぇつけられたらしいよ」
　およそ夫婦の会話らしくない会話。夕食を食べ終わった直後のことだった。
　秋野知美とアドレスを交換してから2週間。彼女はまめに僕にメールを送ってきた。その内容が男慣れしていそうな文章で、僕も独身だったらぐらっときたかもしれない。
「やばいってなにが？」
　僕が他の女の人とメールをしているということよりも、美咲は相手の女に興味があるらしい。ソファにもたれかかって不思議そうな表情をしている。
　僕はさっさとメールに返信してから、ケータイをぱしんとたたむ。
「わかんない。同じ課の人がそう言ってただけだから・・・・・なにそれ？」
　気づくと美咲が届いた郵便物の封筒を見ているのが見えた。少し興味を持って僕は近づく。
「んー・・同窓会もどきのお知らせだって」
「もどき？」
「そう。友達とか恋人とか連れてきてもオッケー！みたいな？そんなカンジの集まりだって」
「へー、おもしろそうじゃん。行ってきなよ」
　僕の高校では度々同窓会が行われるが、そんな誰でもオッケー的なものではない。
　だが、美咲は乗り気ではないらしい。
「こんな体だよ？行ったらいろいろ言われそうでやだな」
「あー・・・そうかぁ」

僕はその手紙をしげしげと眺める。むしろ友達・恋人を連れて来いという書き方をしていて驚いた。ふとそのとき思った。
「恋人オッケーなら俺も行ってもいいってことだよね？」
別に行きたいわけではなかったが、そう言った後の美咲の反応を見て行くことを決めた。

同窓会もどきは美咲の高校3年生のときのクラスの集まりらしく、クラスメートの1人の両親が経営する旅館の大広間を貸し切って行われた。
予定よりも何分か遅れて到着し、僕らは目立たないように中に入った、つもりだったが、ふすまを開けると中にいた１００人くらいの人間が一気にこっちを向いた。
女の1人が声をあげた。
「美咲！」
数人の女の人が走ってくる。その中の1人は僕も見たことがある、結婚式に来ていた人だ。
「よかった！来ないかと思ったんだよ～。みんなー！美咲来たよー！！」
「武藤さんか！久しぶりー！って子供？」
美咲は女の集団に連れて行かれる。僕はなぜか男の集団の輪の中に引っ張り込まれた。
「もしかして、武藤さんの彼氏！？」
「えっと・・・一応結婚しました」
「結婚！？」
やっぱり意外なんだろう。っていうよりも相手が僕だったことに驚いているのだろうか。

しばらく彼らと話しているうちに、美咲の高校時代の姿が明らかになってきた。
美咲は心を許した人にはとことん許すのだが、そうじゃない人に

はあまり懐かない猫みたいだったそうだ。美咲に気に入られようと男子の何人かが必死にアプローチをかけたみたいだが、逆にうっとうしがられたとか。確かにそんな気がする。
「ここだけの話、武藤さんってかなりモテたよ。なにより顔がかわいかったし」
美咲の少し荒れていたときは、ひょっとしたら岸本と婚約が決まってからじゃないだろうかとふと考えた。
今、美咲は友達に囲まれてすごく楽しそうにしている。その笑顔を見ているだけで今日は来てよかったと思う。
しかし、そのとき、美咲のすぐ隣に見知った顔を見た気がした。もう1度よく見てみると、今度ははっきりとわかった。
「秋野さん・・・？」

「ここまでの感想から言わせてもらいますと、確かに葉山さんはいい人です」
「え？なにがですか？」
みんなから離れて秋野と2人きりになる。彼女は開口一番、そんなことを言い出した。
「美咲からよく旦那さんの話を聞いてて、まぁ結婚式で見ただけだったからへーとしか思わなかったけど、こないだウチの姉が葉山さんに会ってタイプだったって騒いでたから気になったんです。そうしたら、ウチの会社に入ってくるんだもん、もう日本って狭いなー」
それだけのことを一気に話し終えると、秋野は僕をにらむように見てきた。
「メールでのやり取りで、私明らかに気があるように書いてたでしょ？でも、葉山さんは私を傷つけないようにやわらかい文章で返してきました。メールって人柄が出やすいんだよね。あっ、勘違いしないでね。私には好きな人がいるんだから。不倫だけど」
磯崎が言っていたのはこのことだったのかと今さらになって考える。

「秋野さんの姉って・・・・？」
「北海道で会わなかった？多恵っていうの。私の姉」
「あぁぁぁそっか・・・・・」
急に力が抜けてきた。いろいろと考えた自分がバカみたいに思えてきた。
秋野はくすくすと笑って僕を見る。ここで会わなかったらずっと僕のことをからかっていたことになるのだ。
それにしても本当に偶然だ。多恵の妹が秋野に当たるのか。確かに顔立ちが整っているところは似ているかもしれない。

「やっぱり秋野のことだったんだ。会社の女との愛のメールって」
いつのまに傍にいたのか、美咲が背後に立っていた。
「あったりー！旦那さん美咲のことしか見えてないみたいだけどね。浮気の心配ナッシング」
「浮気なんてしたらぶっ飛ばしてるよ」
「え・・・えぇ・・・美咲、知ってたの？」
1人だけ話が見えなくて僕は混乱してしまう。しかし、美咲はあっさりとしていた。
「うん。秋野は短大出てすぐ孝介が今いる会社に入ったんだから。それに少し前に『旦那試していい？』って言ってたしね」
「ばれたか」
秋野はおかしそうに笑った。僕は頭が痛くなってきた、が・・・
「今日一緒に来てくれてありがと。久しぶりにみんなに会えて嬉しかった」
美咲の笑顔を見てつられて笑った。
「俺は美咲の恥ずかしい高校時代の話を聞けておもしろかったよ」
「はぁ？なに聞いたんだよ！？」
「教えない」
「孝介！！」
はたから見るとただののろけたカップルのようだった。僕は美咲

のパンチをかわしてるだけなのだが、逆にそれがそんなふうに見えたらしい。
「いいなぁ、美咲。あんなに優しい旦那さんに出会えて。私も幸せな結婚生活を送りたいなー・・・」
そんな声は聞こえなかった。

そして、今日もいつもの日常が始まる。
「やっべ！遅刻しそうだ！」
「昨日飲みすぎだっつーの！」
同窓会の翌朝、寝坊して僕は会社に遅れそうになった。慌ててスーツを着て朝ごはんのパンを牛乳と一緒に飲み込む。ちなみに、美咲は僕のために弁当を作ってくれたが、まだ起こすには時間があるからと思って2度寝したら寝過ごしたらしい。
「あっ！弁当！せっかく作ったんだから持ってってよ！」
「サンキュ」
弁当箱を受けって家を飛び出す。だけど、あることを忘れてまた玄関まで戻ってきた。
「忘れ物だ！」
「なにを！？」
美咲も慌てる。
僕はしゃがみこんで美咲の大きなお腹に話しかける。
「お父さん、今日もがんばって仕事してくるぞ！」
もうすぐ会える我が子に話しかける。こういうふうに話しかけたほうがいいそうだ。
それから立ち上がって美咲にキスをする。不意打ちだったから、美咲はそのまま固まってしまう。時間にして約3秒。僕は唇を離した。
「・・・いってきます」
「いってらっしゃい・・・・」

美咲は少し恥ずかしそうに顔をそらして言う。僕がじっと見つめているのに気づいたらしくて、顔を真っ赤にさせて僕を追い出そうとする。あいかわらずウブだ。

「早く行けー！」

「照れるなって。続きは家に帰ってからな」

「うるさい！っていうか、早く行け！マジで遅れるぞ！」

「やっべ！」

いつもの日常。それが僕は好きだった。

最終話　やっぱりおしどり夫婦へ（後書き）

これにておしどり夫婦へ２は終了です。

ここまでおつきあいしてくださってありがとうございました！

あと番外編を書いてこの話は終了です。

そういえば、文中におしどり夫婦という言葉が一言も
出てきませんでした。
あくまでそれを目指すという意味でとってください。

番外編　出産、そして・・・（前書き）

前半はおまけっぽく、いわゆる番外編です。

そして後半は数年後の世界です。

番外編　出産、そして・・・

「絶対嫌だ！！」
「なんで？今さら恥ずかしがることでもないじゃん」
「そういう問題じゃない！とにかく嫌だから」
「それじゃぁプレステで俺に負けたバツゲームにならないだろ・・・」
それは今から2時間前の出来事。夕ごはんを食べ終わって暇だから美咲とプレステをやっていたときのことだ。懐妊祝いとして清水夫妻からもらった格闘ゲームをやっていたら、年甲斐もなく燃えてしまった。
「負けたほうが勝ったほうの言うこと聞くってどうよ？」
そのセリフを言ったのは美咲だった。このときの僕は意味不明な自信があって勝負に乗った。昔からファミコン、６４、プレステ、とにかくゲームの勝負にはなぜか強かったからだ。
「私が勝ったら、孝介一生ごみ当番だから」
「そんなら俺が勝ったら・・・・・」

僕が出した条件は、美咲と一緒にお風呂に入ることだった。だけど、いざゲームに勝っても美咲はかたくなにそれを拒み続けた。美咲の言い分はとにかく恥ずかしいらしい。
「明るすぎるんだよ・・・」
「・・・・わかったよ。じゃぁ肩でももんでもらおうかな」
デスクワークで疲れ始めた肩と腕をぶんぶんと回してソファに座ると、突然美咲に首を絞められてしまった。冗談じゃなくぐぇっとなった。
「約束は約束だ」
異様に低い声で美咲は先にお風呂場へ向かって行った。

お湯を溜めてから15分。溜まったことを知らせるぴーっという機械音を聞いて僕らは脱衣場へ行く。
実は、僕は女の人とお風呂に入るのは初めてだった。もちろん昔は母と入っていただろうが、つきあっていた彼女ともお風呂だけは一緒に入ったことはない。だから、美咲とも初めてだ。
僕らは無言で服を脱ぎ、浴室に入っていく。互いに簡単に体を洗ったり、顔を洗ったりしてから浴槽につかる。
「いい湯だー・・・」
僕が能天気にくつろいでいるのに対し、美咲は正座してとても小さくなっていた。
「そんなに恥ずかしがらないでもいいって」
「孝介ってさ」
美咲は僕の一点を見つめて目を離さない。それが僕の足だということに気づいた瞬間、がしっと足を持ち上げられてしまった。完全な不意打ちで、僕はそのまま頭がお湯にどぼんとはまった。
「ごめん。ただ、毛が少ないよなって思って」
美咲はぱっと足を離す。ようやく僕は起き上がれた。っていうか、かなり驚いた。
「なんの・・・・なんの話・・・ですか」
「男の人って足もっとスネ毛がすごいじゃん。孝介はそんなにだなーって」
確かに、高校のときにそんなことを言われたことがあった。どうも毛穴が少ないのか、ひげもあんまり生えないのだ。
「だから俺はハゲるって」
「ハゲたら離婚な」
「なにそれ。もう離婚宣言？」
わりとシャレにならないことを言われて、少しショックだった。だけど、美咲は苦笑して手でお湯を飛ばしてきた。
「冗談だ・・・・あれ、またお腹痛いや」
「お腹？」

聞き返してから僕ははっとした。これはもしかしたら・・・・・・
「陣痛！？」
「どうだろ・・・ただの便秘かもしんない」
とは言ったものの彼女の腹痛は結構ひどいらしい。すごく迷った挙句、僕は美咲を病院に連れて行くことにした。

「陣痛ですね。もうすぐ生まれると思います」
女医さんにそう言われたときは、予定日よりも早かったからかまだ実感がわかなかった。
生まれる？僕たちの子供が？
「葉山さんが傍にいてしっかり奥さんを支えてあげてください」
「はっはい！」
なんて意気込んでみたものの、いざ美咲の傍に行くと逆にこっちが不安になってしまった。
普段顔に汗をかかない美咲がびっしょりと汗をかき、何かに耐えるようにぎゅっと目をつむっていた。
「美咲！」
「あ・・・こーすけ・・・・」
「俺がずっと傍にいるから、だから・・・大丈夫」
何が大丈夫なんだろうか。自分に問いかけたが、美咲は苦しそうに顔を歪ませた後、しっかりと頷いた。

それから何時間たっただろう。美咲は時々うめき声をあげながらもまだお産を迎えていなかった。
情けない話だが、僕はずっと不安に押しつぶされそうだった。美咲の手を握っていなかったら、きっともっとパニックになっていただろう。
近くで看護士さんが美咲の汗をふいている。僕もそれにならって、持ってきたタオルで美咲の汗をふこうとした。だけど、彼女の手を離そうとしたが、美咲は僕の手をぎゅっと握ったまま離そうとはし

なかった。
「大丈夫。大丈夫だから」
少し目を開けて、美咲は僕の声に頷いた。
そして、そのときから彼女の表情がさらに苦しいものに変わった。
新たな命が誕生し、元気な産声をあげたのはそれからすぐのことだった。

今さらと言われるかもしれないが、ここでの一人称が『僕』なのに、会話では『俺』になっている。
これは、今の僕が昔のことを思い返した話だ。
今、僕の傍には4歳になった娘がいて、一緒にしゃがみこんで合掌している。ある人のお墓の前で。
「お父さん、ずっとお祈りしてる」
あどけない表情で娘の光(ひかる)は話す。僕は光の頭をなでた。
「とっても大切な人だよ。この人がいなかったら、きっと光には会えなかったかもね」
光の驚いた顔を見て僕は立ち上がる。墓の主に目配せして光を促して帰り道を行く。
1年に1回、この日になると今までの思い出が鮮明に蘇る。1つ1つの偶然が今の僕を生み出してきた。
「あっ・・・」
目の前にある人物が現れた。光が嬉しそうにその人のもとへ駆けていく。

僕も光の後に続いた。一生かけて守りたい人のもとへ・・・・・・

END・・・・・

番外編　出産、そして・・・（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

誰のお墓なんでしょう・・・？

そして、最後に誰が現れたのでしょうか・・・？

お墓の人も最後に現れた人もこの作品に登場した人です。

その人は―・・・・・・・・

で・・・・

誰もわからなかったらその人物の名前を書こうと思ったのですが

何人かの方に感想をいただき、悩みました・・・

皆さん正解です。だから、予想した人がその人物だと

思ってくださって大丈夫だと思われます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4565e/

おしどり夫婦へ２

2010年10月8日13時16分発行